



平成 26・27 年度

県立広島大学大学教育再生加速プログラム (AP)

事業報告書

県立広島大学 AP 事業推進部会

## 平成26・27年度県立広島大学AP事業報告書 目次

■はじめに	1
■本学のAP事業について（平成26年8月～平成28年3月）	2～7
AP事業部会開催状況	8～10
教学マネジメント勉強会講演資料	11～17
■CLAL（県立広島大学型アクティブ・ラーニング）の推進について	18
■CLAL導入状況／意識調査の実施について	19
行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査について	20～21
AP事業に係る先進事例調査等のための経費支出について	22
平成27年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について	23～24
平成27年度担当科目におけるCLAL導入状況調査／集計結果	25～36
平成27年度CLALの導入に係る意識調査／集計結果	25～36
■FDer（ファカルティ・ディベロッパー）の養成について	37
FDer養成講座講演資料（第1回～第2回）	38～45
■学修支援アドバイザー養成について	46
学修支援アドバイザー養成講座講演資料（第1回～第2回）	47～63
■広報活動および学内外からの意見聴取について	64
平成26年度県立広島大学教育改革フォーラム講演資料	65～84
AP事業推進部会ニュース（vol.1～vol.2）	85～92
SPODフォーラムポスター発表資料	93
本学教員による学外における事例発表資料	94～105
大学教育再生加速プログラムパンフレット用事例集	106
平成27年度県立広島大学教育改革フォーラム講演資料	107～128
■おわりに	129



## はじめに

平成 17 年 4 月、それぞれに歴史のある広島県立 3 大学の統合により、県立広島大学が開学しました。「地域に根ざした、県民から信頼される大学」を基本理念とする本学は、平成 19 年 4 月に公立大学法人となり、地域の発展に寄与する人材育成の歩みを続けています。

平成 25 年 3 月、第二期中期目標が策定され、平成 30 年度までの 6 年間で「実践力のある人材の育成」を目指した大学教育改革を一層強く推し進めることが次のように謳われました。

社会経済情勢の変化に柔軟に対応し、企業や地域社会において活躍できる実践力のある人材を育成するためには、主体的に問題を発見し、解を見出す能力の向上が求められており、能動的学修の導入など学生の主体的な学びを拡大するよう教育方法の転換を行う。また、学部学科の枠組みを越え、各領域の専門性や強みを全学的な資源として活かし、特定領域の専門性を深めるだけでなく、幅広い知識の修得や複眼的な学修を可能とし、学生の動機付けや学修意欲の向上につながるよう、教育内容の質的向上・質的転換を図る。さらに、教員中心の授業科目の編成から、学位を与える課程としての「教育プログラム」中心の授業科目の編成への転換など、教育課程の体系化や組織的な取組を進め、教育体制の整備を図る。（「公立大学法人県立広島大学 第二期中期目標」 p.2 より）

本学が平成 26 年度に採択された文部科学省大学教育再生加速プログラム (Acceleration Program for University Education Rebuilding: AP) テーマ I (アクティブ・ラーニング) は、私たちの大学教育改革を後押ししてくれるものとなりました。この補助金によって加速する取組は、次のようにまとめることができます。

地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かし深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学習者 (アクティブ・ラーナー) の育成を目指す。(AP 事業取組概要より)

平成 26 年度後期から 1 年半、従来より重ねてきた教育改善に新たな要素を盛り込みながら、AP 事業を続けてきました。本報告書は、平成 28 年 3 月までの取組状況を記録し、今後の検証と計画策定に役立てようとするものです。

本学の教育に関心をお持ちの多くの方々にご覧いただきたいと思います。

平成 28 年 3 月

県立広島大学 AP 事業推進部会



# 本学の AP 事業について

(平成 26 年 8 月～平成 28 年 3 月)

## 1. 教育改革の背景

平成 17 年度に広島県立 3 大学を統合し、県立広島大学としてスタートして以来、本学では 3 キャンパスを結ぶ遠隔講義システムによる全学共通教育の実施や、全学的な FD 活動の推進など、教育改善に不断の努力を重ねてきた。

統合時に設置された総合教育センターによって平成 25 年度までに行われた FD 活動では、シラバス、授業改善アンケート、GPA、キャリア・ポートフォリオ、ティーチング・ポートフォリオ、ICT の活用、ルーブリック、アクティブ・ラーニングの手法など、多岐にわたるテーマを取り上げている。この積み重ねは、本学における諸制度の整備や、個々の授業改善に一定の役割を果たしてきた。授業に対する満足度の高さがそれを示している。授業改善アンケートによる総合的な満足度は、平成 17 年度後期の肯定的回答は 80.3%であったが、平成 25 年度後期は 94.1%であった。

一方、満足度の割に、学生の主体的な学びを十分引き出せていないことが課題として残されていた。授業改善アンケートによると、自主的な学習を行ったと答えた学生は、平成 25 年度後期で 80.9%であった。もう一つの課題は、価値観の異なる者同士が協働する機会を十分に与えられていないことである。キャンパスごとに学生が学ぶ専門分野は異っているが、そうした学生間の交流場面は限られてきた。

これらの課題解決は、第二期中期計画（平成 25～30 年度）で謳われた「実践力のある人材の育成」を達成する過程で図られるものと思われる。第二期中期計画には次のような内容が盛り込まれている（抜粋）。

【概要】 地域に軸足を置き、世界を視野に活躍できる人材の「育成拠点」として、全学的な教学マネジメントの下、地域や社会における今日の人材養成ニーズなどを踏まえた、体系性を有する教育プログラムの編成、学生の能動的な学修の拡大、学修成果の検証・可視化、国際化や大学連携の推進などに取り組む。

### 【個別項目の例】

- ・人材育成目標の明確化
- ・教育プログラムの改善と構造の明示
- ・教育内容・方法の改善に資するFDの推進
- ・学修成果の把握と検証
- ・学修時間の実質的な増加・確保とその的確な把握
- ・全学的な教学マネジメントの確立
- ・副専攻プログラムの導入と他学部履修等の促進
- ・全学共通教育の充実
- ・地域社会で活躍できる実践力等の育成

平成 26 年 3 月には、次の「人材育成目標」が策定された。

県立広島大学は、主体的に考え、課題解決に向けて行動できる実践力と豊かなコミュニケーション能力を備え、幅広い教養と高度な専門性に基づいて、高い志とたゆまぬ向上心をもって地域や国際社会で活躍できる人材を育成します。

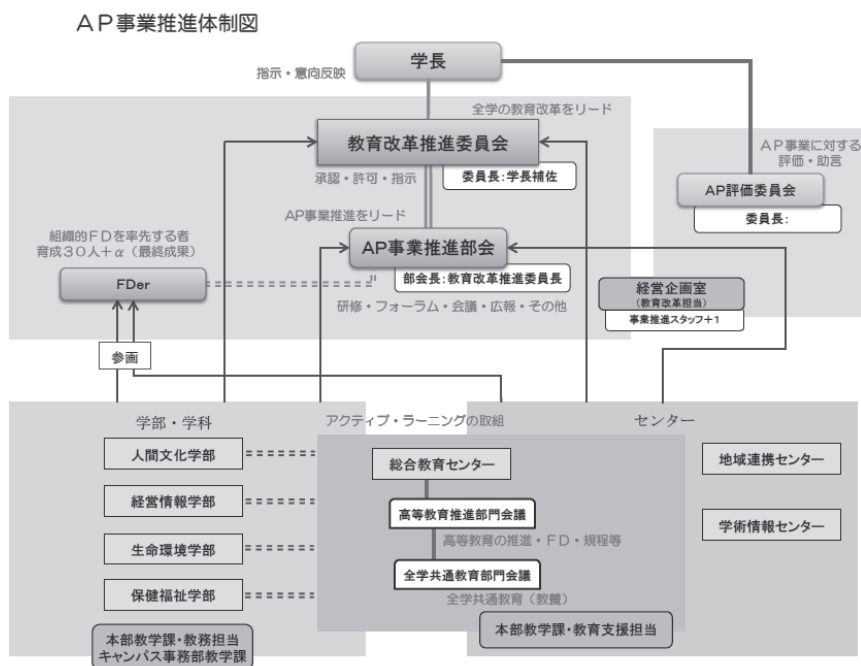
この実現へ向け、本学では、(1) 教学マネジメントの強化、(2) 体系的な学士課程教育プログラムの導入、(3) 教育方法の見直しと充実、というステップで教育改革を進めている。

## (1) 教学マネジメントの強化

教育改革を進める教学マネジメント強化策として、平成 25 年度より新たに教育改革担当学長補佐を置き、その学長補佐を委員長とする教育改革推進委員会を発足させた。この委員会は部局長を構成員とし、全学的な教育改革の方向付けを行っている。

平成 26 年度の AP 採択を受け、委員会のもとにワーキング（AP 事業推進部会）を組織し、具体的な協議と運用を担っている。事業の着実な推進を狙い、平成 27 年 3 月には執行部・管理者向けの教学マネジメント勉強会を開催した。

次の図は、平成 26 年度の事業推進体制図である。平成 27 年度の事務組織改編に伴い、現在は本部教学課が事務を所管している。



### [参考資料 1]

- ・ AP 事業推進部会開催状況 (p.8~10)
- ・ 教学マネジメント勉強会講演資料 (p.11~17)

## (2) 体系的な学士課程教育プログラムの導入

教育改革推進委員会発足後、「幅広い履修を可能とする仕組みづくり」と「全学共通教育の充実・改革」が早急に取り組むべき課題として示された。これらは、副学長（教育・学生支援担当）がセンター長を務める総合教育センターにおいて、高等教育推進部門および全学共通教育部門の検討課題とされ、専門の枠を超えた「異文化間コミュニケーション認定プログラム」や、自由選択枠を含む新たな全学共通教育プログラムという形で具体化され、平成 27 年度の入学生から適用されている。

新たな全学共通教育課程表は、「初年次導入」「基盤（外国語・情報・保健体育）」「キャリア」「教養（人文系・社会系・自然系・教養ゼミ）」「広島と世界」という 5 つの科目群で構成されている。全科目の全学共通の狙いを明確にし、アクティブ・ラーニング（以下、AL）を積極的に導入することとした。全学共通教育においては、次の力を身に付けさせることを狙っている。

- ・学問的成果を踏まえた幅広い知識を習得している。
- ・物事を多面的に捉え、自らの考えを組み立て、伝える力を身につけている。
- ・課題に気付き、その解決に向けて熟考し、行動を起こすことができる。
- ・他者を理解・尊重し、ともに豊かな社会づくりに貢献できる。

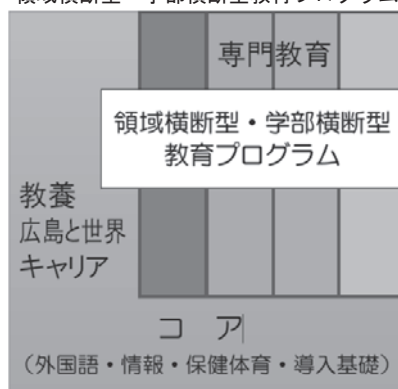
初年次導入と基盤科目の多くは 2 年次までに配当する一方、それ以外の科目は極力上位学年まで履修可能とした。専門と並び立つ教養の涵養は不可欠であるという全学共通教育の理念を「L 字型」と呼び、時間割上の配置などの検討を行いながら、その具現化に努めている。

幅広い履修を可能とする仕組みとして構想された領域横断型・学部横断型プログラムは、平成 27 年度より「異文化間コミュニケーション認定プログラム」としてはスタートした。学部学科を超え、卒業時まで一定の単位を修めた者を認定するプログラムである。

#### 新しい全学共通教育



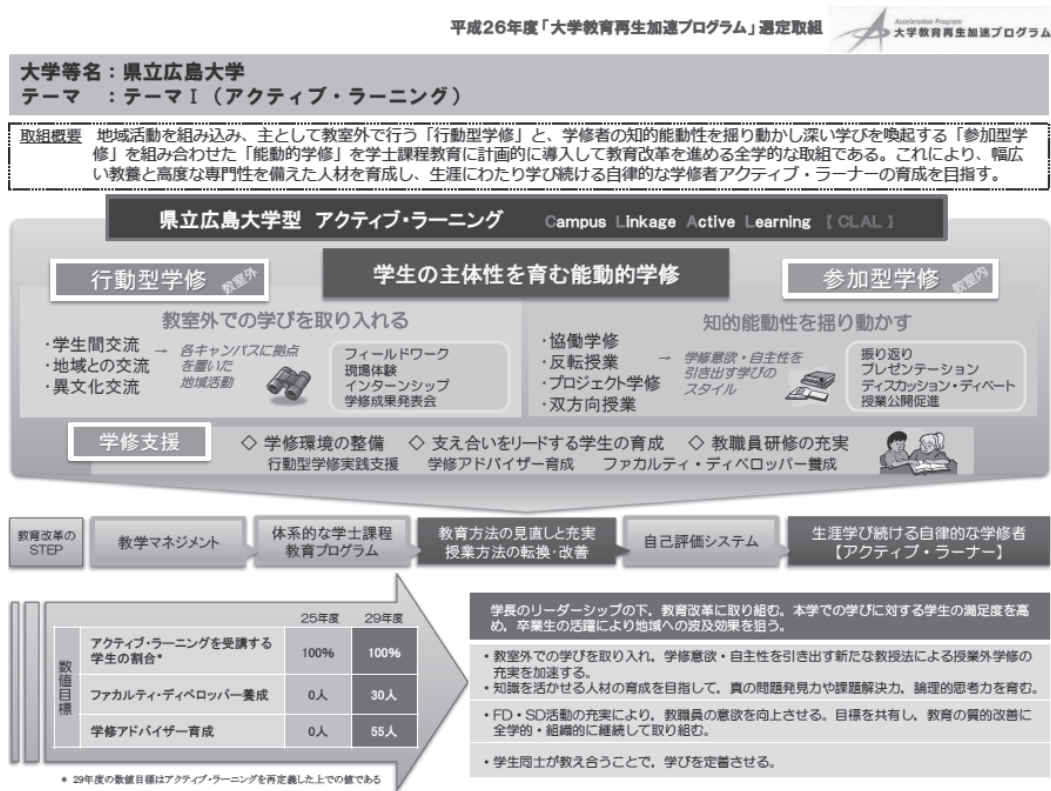
#### 領域横断型・学部横断型教育プログラム



### (3) 教育方法の見直しと充実

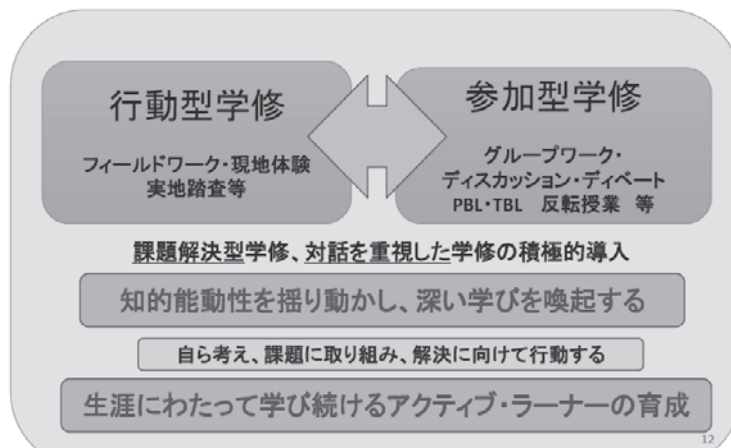
以上の教育改革の動きを背景に、平成 26 年度、大学教育再生加速プログラム（A P）テーマ I（アクティブ・ラーニング）に採択され、「教育内容の見直しと充実」に重点を置いた教育改革を加速させている。「県立広島大学型アクティブ・ラーニング」を通じ、生涯学び続ける自律的な学修者（アクティブ・ラーナー）を育成することを目指している。

## 2. 本学AP事業の概要



本学における「アクティブ・ラーニング(AL)」は、学生の主体性を一層引き出すために、3つのキャンパスに分かれた学生に協働の場を提供することなどを狙っている。「参加型」「行動型」という考え方はそれに基づいている。

「参加型」は、主に教室内でディスカッションやディベートなどの主体的な学修機会を設け、学生の知的能動性を引き出すものである。一方「行動型」は、主に教室外でのフィールドワークなどの体験を通じ、キャンパスを超えた学生間や地域との交流を促すものである。



「行動型」「参加型」の学修により、キャンパス内やキャンパス間での協働、さらに地域との結びつきに支えられた授業の活性化が始まることを念頭に、本学のALをCLAL (Campus Linkage Active Learning, 「クラル」) と名付けた。約100キロ離れたキャンパ

空間の距離を、マイナスではなくプラスに転じようという本学ならではの試みと言える。  
CLALの目的を達成するため、本学では次の3つの柱を設け、事業を展開している。

- (1) ALの推進
- (2) ファカルティ・ディベロッパー (FDer) の養成
- (3) 学修支援アドバイザー (SA) の養成

## (1) ALの推進

- a) ALの実践を組織的に導入するため、まず行動型学修に参加する経費助成の制度をスタートさせた。新しい全学共通教育科目の科目群「広島と世界」を中心に、フィールドワークや現地実習の交通費を助成している。
- b) 教職員に対して先進事例の調査を促し、その旅費を助成している。全国各地で開催されるセミナー等の受講のみならず、本学の事例報告も徐々に増えている。
- c) ALを展開する環境整備として、ICT機器をラーニングコモンズへ順次導入している。
- d) ALの導入状況を調査するとともに、教員の意識調査を実施し、AL導入を加速する上で必要な措置を講じている。

### [参考資料]

- ・CLAL（県立広島大学型アクティブ・ラーニング）の推進について（p.18）
- ・CLAL導入状況／意識調査の実施について（p.19）

## (2) ファカルティ・ディベロッパー (FDer) の養成

- a) 全学共通教育や専門科目を担う各学科、センター教員の中からファカルティ・ディベロッパー (FDer) を養成し、ALの全学的な普及をスタートさせた。平成29年度末までに、30名のFDer養成を計画している。候補者となるのは、AP事業推進部会員、学科・センターからの推薦教員、上記(1)a)の行動型学修の申請を行った教員、上記(1)b)の先進事例調査の申請を行った教員とした（平成27年12月時点で36名）。候補者を対象に、養成講座への参加（DVD視聴を含む）を促し、平成28年度より正式にFDerとして活動する準備としている。
- b) 平成27年度はFDer養成講座を4回計画した。第1回講座「FDerとしてアクティブ・ラーニングを考える」において、深い学びへの過程を理解するICEモデルを学ぶとともに、FDerに期待される役割を検討した。FDerは自らアクティブ・ラーニングの実践者であると同時に、組織的な浸透を図る役割を担う。第2回講座「広島大学の教養ゼミにおけるPBL (Problem-Based Learning) の導入について」、および第3回講座「アクティブ・ラーニングを促す30の技法（大人数クラスでの活用を含む）」においては、実践者として具体的な手法を学ぶと同時に、遠隔で結んだ各キャンパス会場内でのファシリテータとして参加した。第4回講座は今年度の教育改革フォーラムの発表者として、また、運営にかかわるメンバーとして、FDer候補者が活躍する場となった。

### [参考資料]

- ・FDer（ファカルティ・ディベロッパー）の養成について（p.37）



### (3) 学修支援アドバイザーの養成

a) 自律的学修者は学生相互の学び合いを通じて生まれる。既存のラーニング・コモンズにおけるアドバイザー制度との融合を図りながら、学生が学生を支援する「学修アドバイザー（SA）」の養成に着手した。平成 29 年度末までに 55 名の SA を養成する計画である。

b) 学修支援アドバイザーを養成するため、教職協働でその基本を学ぶ研修会を 2 回実施した。第 1 回は「学生による学修支援：大学教育における役割を考える」をテーマに、SA の重要性と他大学における実践例を学んだ。第 2 回は「教職協働で育てる学修支援アドバイザー」をテーマに、SA に期待する役割や、その養成に必要な事柄について、教職員のグループワークによって理解を深めた。この研修を踏まえ、平成 27 年度末には、学科推薦および自薦で SA 候補となった学生に対する養成講座を開催する予定である。

#### [参考資料]

- ・学修支援アドバイザー養成について (p.46)

### 3. 広報活動

#### a) 学内外のフォーラム・研修会

平成 27 年 3 月 7 日には平成 26 年度県立広島大学教育改革フォーラムを開催し、本学の取組説明、7 件の実践報告、総合討論を実施した。同月第 21 回大学教育研究フォーラム（3 月 14 日、京都大学）に参加し、2 件の実践報告を行った。

新年度に入り、平成 27 年 8 月には SPOD フォーラム 2015（8 月 26 日、愛媛大学）にて、取組の全体像を示すポスター発表を行った。9 月には私立大学情報教育協会平成 27 年度教育改革 ICT 戦略大会（9 月 3 日、私学会館）にて、課題提起を行った。

平成 28 年 3 月 4 日には、平成 27 年度県立広島大学教育改革フォーラムを開催し、「アクティブ・ラーニングの導入と評価」というテーマのもと、取組概要と実績報告、ループブックに関する先進事例の講演とワークショップ、5 件の実践報告、総合討論を行った。第 22 回大学教育研究フォーラム（3 月 17 日、京都大学）でも、引き続き本学のアクティブ・ラーニングの実践例をポスターならびに口頭で発表した。

他の AP 採択校との連携も進み、平成 28 年 3 月 3 日には比治山大学における AP セミナーで報告し、3 月 14 日には広島・山口地区採択校 4 大学 1 高専のジョイントフォーラムを共催した。

#### b) 広報物等

AP 事業推進部会ニュースを発行（1 号：平成 27 年 3 月 / 2 号：平成 27 年 7 月）し、学内外へ配布した。これらは保護者や同窓生の集まる場での情報提供にも活用し、ステークホルダーからの意見聴取の資料としている。

#### [参考資料]

- ・広報活動および学内外からの意見聴取について (p.64)
- ・平成 26 年度教育改革フォーラム講演資料 (p.65~84)
- ・本学教員による講演会等における事例発表資料 (p.94~105)
- ・平成 27 年度教育改革フォーラム講演資料 (p.107~128)

## AP事業推進部会開催状況

平成26年度

回数	日時	議題（審議事項）
第1回	平成26年10月6日（月） 16:20～	<b>【審議事項】</b> 1 AP事業推進部会について (1) AP事業推進部会要領（案）について (2) 体制図（案）について (3) 任務について (4) 平成26年度スケジュールについて
第2回	平成26年11月6日（木） 16:20～	<b>【審議事項】</b> 1 本学におけるアクティブ・ラーニングの定義について 2 学修アドバイザー養成講座の実施について 3 本学のファカルティ・ディベロッパーについて 4 フォーラムの開催について 5 行動型学修支援について <b>【報告事項】</b> 1 AP事業推進部会について 2 事務補助員（賃金職員）の採用について
第3回	平成27年2月18日（水） 14:40～	<b>【審議事項】</b> 1 教育改革フォーラムについて (1) 運営について (2) アンケート（案）について 2 平成27年度補助金調書（案）について <b>【報告事項】</b> 1 アクティブ・ラーニング導入状況調査結果について 2 行動型学修に参加する学生への経費支援について 3 教学マネジメントの構築に向けた勉強会の開催について 4 平成26年度外部セミナー等参加報告について 5 平成26年度購入書籍について
第4回	平成27年3月25日（水） 16:20～	<b>【報告事項】</b> 1 教育改革フォーラムの実施について 2 平成27年度補助金調書について 3 教学マネジメントの構築のための勉強会について 4 平成26年度取組報告について (1) 外部セミナーへの参加報告について (2) 平成26年度購入書籍について

平成27年度

<p>第1回</p>	<p>平成27年6月18日(木) 9:15～</p>	<p><b>【協議事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 事業実施期間中及び平成27年度の事業実施計画について</li> <li>2 県立広島大学型アクティブ・ラーニング(CLAL)の推進について</li> <li>3 行動型学修に参加する学生への経費助成に関する要領について</li> <li>4 先進事例調査等のための経費支出について</li> </ol> <p><b>【報告事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 AP事業推進部会要領の一部改正について</li> <li>2 平成26年度AP事業実施結果報告について</li> <li>3 文部科学省への提出書類について</li> </ol>
<p>第2回</p>	<p>平成27年7月31日(金) 9:15～</p>	<p><b>【協議事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ファカルティ・ディベロッパーについて(案)</li> <li>2 行動型学修に係る経費助成「体育実技II」について</li> </ol> <p><b>【報告事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 AP事業推進部会ニュース第1号の配付実績及び第2号の配付予定について</li> <li>2 平成27年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について</li> <li>3 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査状況について</li> </ol>
<p>第3回</p>	<p>平成27年9月17日(木) 14:40～</p>	<p><b>【審議事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 ファカルティ・ディベロッパー(FDe r)について(案)</li> <li>2 行動型学修の経費助成に係る要領の変更について(案)</li> </ol> <p><b>【協議事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 学修アドバイザー(案)について</li> <li>2 県立広島大学型アクティブ・ラーニング(CLAL)の基準(案)について</li> </ol> <p><b>【報告事項】</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 AP事業推進部会員の交代について</li> <li>2 第2回教育改革推進委員会における協議事項について</li> <li>3 FDe r候補者の一覧について</li> <li>4 第1回ファカルティ・ディベロッパー養成講座について</li> </ol>



		<p>5 平成27年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について</p> <p>6 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査状況について</p>
第4回	平成27年11月13日(金) 9:15～	<p><b>【審議事項】</b></p> <p>1 県立広島大学型アクティブ・ラーニング(CLAL)の基準について(案)</p> <p><b>【協議事項】</b></p> <p>1 学修支援アドバイザー(案)について</p> <p><b>【報告事項】</b></p> <p>1 文部科学省への提出書類について</p> <p>2 第2回ファカルティ・ディベロッパー養成講座の実施について</p> <p>3 平成27年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について</p> <p>4 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査状況について</p>
第5回	平成28年1月5日(火) 13:10～	<p><b>【審議事項】</b></p> <p>1 学修支援アドバイザーについて(案)</p> <p>2 平成27年度CLAL導入状況等調査について(案)</p> <p><b>【報告事項】</b></p> <p>1 ファカルティ・ディベロッパー養成講座の実施について</p> <p>2 平成27年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について</p> <p>3 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査状況について</p>

## ■■CLAL（県立広島大学型アクティブ・ラーニング）の推進について■■

県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning 以下、CLALという。）の導入を促進するため、CLALの定義を定め、次の取組を行った。

◆平成27年度の補助事業実施計画（平成27年度大学改革推進等補助金調書より一部抜粋）

4月～2月	地域をフィールドとする <u>行動型学修の実践</u> に努める。
5月～3月	他大学視察や学会参加により、 <u>先進事例に関する情報を収集</u> する。
5月～3月	「授業内容の充実」をテーマとして、 <u>組織的なアクティブ・ラーニングを実施</u> している取組を支援する。
6月	後援会総会にあわせて、 <u>ステークホルダーとなる在学生保護者から意見を収集</u> する。
10月～2月	本学の教育改革・学修成果を検証するため、 <u>ステークホルダー対象のアンケート</u> を行う。

### （1）行動型学修に参加する学生への経費支援

平成26年度から、「行動型学修」においてフィールドワーク、学外実習及びその成果発表会等に参加する学生に対して交通費等の助成を行うための要領を制定し、各授業におけるアクティブ・ラーニングの導入を促進することとした。

- 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査について（p.20~21）

### （2）先進事例調査にかかる経費支援

校内教職員に対して、先進的な取組を行っている大学への訪問調査又は各種セミナー、講演会、研修会、フォーラムへ参加する際の旅費を支出することとし、教職員のアクティブ・ラーニングへの理解を促進した。

- 「AP事業推進に係る先進事例調査等のための経費支出について」（p.22）
- 平成27年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について（p.23~24）

### （3）学修環境の整備（ICT機器の導入）

広島キャンパス内図書館内ラーニングcommonsにおいて、電子黒板の設置およびタブレットの貸出を行い、授業における参加型学修の導入を促進した。

### （4）教職員向け研修会の実施

教職員に向けて、FD研修会として、CLAL推進にかかる研修会（FDer養成講座、学修アドバイザー養成講座等を含む）を実施した。

## ■■ CLAL 導入状況／意識調査の実施について ■■

本学 AP 事業において推進している「県立広島大学型アクティブ・ラーニング (CLAL)」について、平成 27 年度の導入状況等を把握し、今後の CLAL の推進に活用するため、CLAL の定義を定め、本学教員及び非常勤講師を対象として調査を行った。

◆平成 26 年度の補助事業実施計画 (平成 26 年度大学改革推進等補助金調書より一部抜粋)

9 月～10 月初旬	APWG (大学教育再生加速プログラム・ワーキンググループ) を再編成して設置。事業推進体制を整えるとともに、 <u>アクティブ・ラーニング導入科目の認定のための指標を明確に定義する等</u> 、事業開始に当たっての課題を整理し、調整する。
------------	--

### 【実施概要】

#### (1) 実施期間

平成 28 年 1 月 8 日 (金) ～ 2 月 8 日 (月)

#### (2) 対象教員

平成 27 年度に学部の授業を担当している全教員 (非常勤教員を含む)

#### (3) 実施する調査

- ① 「平成 27 年度 担当科目における CLAL 導入状況調査」 (p.25~26)
- ② 「平成 27 年度 CLAL の導入に係る意識調査」 (p.27~29)

	① 導入状況調査	② 意識調査
調査目的	平成 27 年度の全開講科目における CLAL の導入状況の把握	平成 27 年度に授業を担当している全教員の、CLAL の導入に対する意識の把握
調査方式	質問紙の配布・回収	
調査対象の単位	科目単位 〔全開講科目分の導入状況を調査する〕	教員単位 〔担当科目数に関わらず、教員個々人の意識を調査する〕
質問内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ CLAL の導入状況 〔CLAL の定義に定める時間以上アクティブ・ラーニングを実施しているか。〕</li> <li>・ 実施しているアクティブ・ラーニングの手法</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ CLAL を導入したことによる学生への効果</li> <li>・ CLAL を導入していない理由</li> <li>・ CLAL の導入に必要な支援等の要望</li> </ul>
回答	必須	任意

※ CLAL の定義は調査票を参照

#### (4) 調査結果の利用方法

- 集計の上、AP 事業推進部会にて報告する。また、学内 Wiki を通じて全学に公表する。
- 文部科学省や AP 評価委員への報告、年次報告書への掲載等に活用する。

#### (5) 調査結果

- p.30~36 のとおり。

## 行動型学修に参加する学生への経費助成に係る申請・審査について

### 1 趣旨

本学 AP 事業では、行動型学修の全学的な導入を推進するため、行動型学修へ参加する学生に対する経費助成事業を実施した。

平成 26 年度から平成 27 年度にかけて実施した経費助成について、申請の内容を次のとおり報告する。

### 2 平成 26 年度の申請・審査状況

平成 26 年度に運用した「行動型学修に参加する学生への経費助成に関する基準」に基づき提出された申請の一覧は次のとおり。

(期間：平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月)

	科目名	対象	実施日	担当教員名
1	地域の理解 (フィールドワーク)	全学科 1 年 7 名	11 月 21 日	五條 小枝子
2	地域の理解 (フィールドワーク)	全学科 1 年 24 名	10 月 26 日 11 月 22 日 12 月 13 日	五條 小枝子
	地域の理解 (合同発表会)	全学科 1 年 1 名	2 月 7 日	

### 3 平成 27 年度の申請・審査状況

平成 27 年度から新たに施行した「行動型学修に参加する学生への経費助成に関する要領」に基づき提出された申請の一覧は次のとおり。

(期間：平成 27 年 4 月～平成 28 年 3 月)

	科目名	対象	実施日	担当教員名
1	情報システム実験	経営情報 2 年生 39 名	6 月 23 日	肖 業貴
	情報技術基礎論			小川 仁士
2	食品衛生学実験	健康科学 1～4 年生 40 名	7 月 28 日	谷本 昌太
3	地域情報発信論	全学科 1～4 年生 87 名	8 月 31 日 ～9 月 4 日	五條 小枝子 馬本 勉 塩川 満久
4	意思決定論	経営情報 3 年生 41 名	11 月 11 日	韓 虎剛
	応用情報システム開発論			重安 哲也
5	プロジェクト研究 (1)	経営 2 年生 5 名	9 月 14 日 ～9 月 15 日	栗島 浩二

6	プロジェクト研究 (2)	経営 2年生 5名	9月16日	栗島 浩二
7	体育実技Ⅱ	全学科 1～3年生 9名	9月8日 ～9月10日	楠堀 誠司
8	留学生と学ぶ広島 (第2回スタディツアー)	全学科 1～4年生 85名	10月3日	柳川 順子 五條 小枝子
9	留学生と学ぶ広島 (第3回スタディツアー)	全学科 1～4年生 85名	12月5日	柳川 順子 五條 小枝子
10	健康管理論	健康科学 2年生 38名	12月11日	松原 みゆき (非常勤講師)
11	東アジア地域史論演習	国際文化 3年生 5名	12月5日	岡本 弘道
12	留学生と学ぶ広島 (合同発表会)	全学科 1～4年生 40名	1月23日	柳川 順子 五條 小枝子
13	地域の理解 (合同発表会)	全学科 1年生 90名	2月6日	五條 小枝子

平成27年6月19日

各位

A P 事業推進に係る先進事例調査等のための経費支出について

A P 事業推進部会長

本学に所属する教職員が、大学教育再生加速プログラム（以下、A P という。）事業に関連する先進事例調査等を実施する際に、A P 事業補助金から経費を支出する基準等は次のとおりです。

1 支出対象となるもの

- (1) Wiki「大学教育再生加速プログラム」の「外部セミナー等のお知らせ」ページに掲載しているセミナー等への参加
- (2) 先進的な取組を行っている大学への訪問調査又は各種セミナー、講演会、研修会、フォーラムへの参加（本学A P 事業の推進に資する内容が含まれているもの）  
※主として次のキーワードを含むこと  
アクティブ・ラーニング、授業改善、ファカルティ・ディベロッパー、学修アドバイザー

2 留意点

A P 事業補助金を利用しての調査実施又はセミナー等への参加を希望する教職員は、内容及び調査結果（情報）の活用方法、学内へのフィードバック方法、所要経費（概算）を明らかにした上で、予めA P 事業推進部会長へご相談ください。

また、調査等実施後は、報告書の作成、資料の回覧、報告会の実施等により、全学的に情報を共有し、A P 事業の推進に繋げていただきます。

3 その他

※申請教員のゼミ・卒業論文の授業など、特定の分野にのみ調査等の実施効果が波及するものは、支出の対象となりません。（A P 公募要領に定められているため）

※予算の範囲内における支出であるため、A P 部会長において、参加人数、開催場所及び所要経費を考慮し、参加人数等について一定の制限をかける場合があります。

※調査結果（情報）等について、年度末に開催予定のフォーラムにおいて、学内外へ向けて発表をお願いする場合があります。

平成27年度AP事業に係る教職員の外部セミナー等参加状況について

**平成26年度の参加状況**

(期間：H26.09.19～H27.03.31)

日程	セミナー等名称	参加人数
H26.09.25	岡山大学教職員研修	3名
H26.11.29	京都光華女子大学シンポジウム (AP)	3名
H26.12.06	広島大学高等教育研究開発センター シンポジウム「学生と大学」	1名
H26.12.06	第5回大学教育改革フォーラム in 九州産業大学	1名
H26.12.20	思考し表現する学生を育てるIV (ワークショップ)	1名
H27.01.24	2014年度京都FDer塾 「カリキュラム・デザインとは何か? - 一貫性のあるカリキュラム構築を目指して -」	1名
H27.02.13	放送大学国際シンポジウム 2015 障害のある学生への支援 - 高等教育と ICT 活用 -	1名
H27.02.20~22	第7回 moodle moot japan	1名
H27.02.21	関西大学 FD フォーラム・AP 採択記念シンポジウム 「21世紀を生き抜く考動人<Lifelong Active Learner>を育成するために~未来を切り開く交渉術~	1名
H27.02.21~22	横浜国立大学 AP 推進フォーラム 「学生のための、学生を成長させる『学修成果の見える化』へ」	2名
H27.2.24	関西大学 AP シンポジウム 「反転学習はディープ・アクティブラーニングを促すか?」	1名
H27.02.28 ~03.01	第20回 FD フォーラム	1名
H27.03.09	山口大学 AP キックオフシンポジウム	2名
H27.03.09	教育ネットワーク中国第6回研修会 (広島国際大学第2回 FD 講演会と共催)「大学教育における反転授業の利活用法」	2名
H27.03.10	比治山大学・比治山大学短期大学部 第1回 AP セミナー	4名
H27.03.13	龍谷大学ラーニングコモンズ開設記念・第10回龍谷大学FD フォーラム 「ラーニングコモンズを学びの空間として育てていくために」	2名
H27.03.13~14	第21回 大学教育研究フォーラム	6名

## 平成 27 年度の参加状況

(期間 : H27.04.01~H28.03.31 現在)

日程	セミナー等名称	参加人数
H27.05.29	大学 FD 学修会 2015	1 名
H27.06.13~14	第 63 回中国・四国地区大学教育研究会	1 名
H27.08.26~28	SPOD フォーラム 2015	3 名
H27.09.02~03	教育改革 ICT 戦略大会	2 名
H27.09.09	比治山大学・比治山大学短期大学部 平成 27 年度第 1 回 AP セミナー	4 名
H27.10.02~04	ファカルティ・ディベロッパー養成講座	2 名
H27.11.28	第 6 回大学教育フォーラム in 九州産業大学	2 名
H28.03.03	比治山大学・比治山大学短期大学部 平成 27 年度第 2 回 AP セミナー	4 名
H28.03.14	AP 事業成果報告 ジョイントフォーラム 2016	5 名
H28.03.17~18	第 22 回 大学教育研究フォーラム	5 名



## 平成 27 年度 担当科目における C L A L 導入状況調査

この調査は、本学における県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning：CLAL）導入の現状と課題を探ることを目的として、平成 27 年度の開講科目を担当している教員（非常勤講師を含む。）を対象として行うものです。

本学は、平成 25 年度からの第 2 期中期計画において、教育改革への取り組み強化を主軸に据え、確かな研究力と教育力に基づき、地域の連携拠点としての実績と強みを活かした人材を育成することをめざしています。この教育改革への取り組みを着実に実施し、より確かなものにするため、平成 26 年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム（AP）」（テーマ I アクティブ・ラーニング）に採択され、「教育内容や方法の見直しと能動的学修の定着」に取り組んでいます。

この調査は、今後の本格的な事業推進、今後のさまざまな取り組みのための基礎資料となるものです。ご回答いただいた調査結果は AP 事業推進部会が責任をもって管理し、統計的に処理します。結果については、統計処理終了後、教育力の向上、授業改善に取り組むための基礎資料としてご活用いただくため、AP 事業推進部会委員を通じて各学部学科・センター等に提供します。また、AP 事業にかかる外部評価委員会や文部科学省等、事業評価に必要な際には情報を提供いたします。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力賜りますようお願いいたします。

なお、AP 事業の概要については教職員専用 Wiki をご覧ください。今年度を実施した推進部会の資料や議事録等も掲載しています。また、ご不明な点がありましたら、下記担当者までお問い合わせください。

お忙しいところ恐縮ですが、平成 28 年 2 月 15 日（月）17：00 までに、調査票に記入の上ご提出くださるようお願いいたします。

AP 事業推進部会長 馬 本 勉

❖提出締切：平成 28 年 2 月 15 日（月）17：00

❖提出先：広島キャンパス：メール室（回収 BOX を設置）  
庄原キャンパス：教学課 AP 担当  
三原キャンパス：教学課 メールボックス

❖問合わせ先：本部教学課教務係 伊藤（AP 事務担当）  
電子メールアドレス s-itou13039@pu-hiroshima.ac.jp  
電話番号 082-251-9710（内線 1188）

この調査では、CLAL を次のように定義しています。

**1 学期における授業（90 分×15 回＝1350 分）の中で 300 分（1 講義あたり 20 分×15 回）以上の割合で、本学が定める行動型・参加型アクティブ・ラーニング手法を取り入れ実施する授業**

※手法や回数を問わず、300 分以上の時間をアクティブ・ラーニングに充てていれば CLAL とします。  
※実習及び実技は「d.その他の行動型手法」、演習及び実験は「p.その他の参加型手法」としてください。

区分	本学が定めるアクティブ・ラーニングの手法		
行動型 （主に教室外）	a. フィールドワーク c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修 d. その他の行動型手法（実習・実技を含む）	b. 体験学修（現地体験、地域活動）	
参加型 （主に教室内）	e. ミニッツペーパー h. グループワーク k. ワークショップ n. 双方向授業 p. その他の参加型手法（演習・実験を含む）	f. 振り返り i. ディスカッション l. PBL <sup>*1</sup> o. 反転授業	g. プレゼンテーション j. ディベート m. TBL <sup>*2</sup>

※1 Problem-Based Learning：問題基盤型学修／Project-Based Learning：課題解決型学習

※2 Team-Based Learning：チーム基盤型学修

CLALの導入状況についてお聞きします。  
回答は、下表太枠内の【問1】及び【問2】の欄にそれぞれ記入してください。

- 【問1】 CLALの導入状況について、該当するほうに○を付けてください。  
 (例) 1学期の授業時間のうちアクティブ・ラーニング実施時間が300分以上 → 導入  
 300分未満 → 未導入
- 【問2】 問1で「導入」とした科目について、実施しているアクティブ・ラーニングの手法を教えてください。  
 回答欄内の選択肢 a～p の中から、該当するもの全てにチェックを入れてください。

所属		氏名
人間文化学部	国際文化学科	西本 寮子

開講時期	開講学部	科目名	【問1】 CLALの導入 状況について	【問2】 実施しているアクティブ・ラーニング手法について
前期	人間文化学部	日本文学論基礎演習 A	導入 ・ 未導入	<input type="checkbox"/> a. フィールドワーク <input type="checkbox"/> b. 体験学修 (現地体験, 地域活動) <input type="checkbox"/> c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修 <input type="checkbox"/> d. その他の行動型手法 (実習・実技を含む) <input type="checkbox"/> e. ミニッツペーパー <input type="checkbox"/> f. 振り返り <input type="checkbox"/> g. プレゼンテーション <input type="checkbox"/> h. グループワーク <input type="checkbox"/> i. ディスカッション <input type="checkbox"/> j. テイベート <input type="checkbox"/> k. ワークシヨップ <input type="checkbox"/> l. PBL <input type="checkbox"/> m. TBL <input type="checkbox"/> n. 双方向授業 <input type="checkbox"/> o. 反転授業 <input type="checkbox"/> p. その他の参加型手法 (演習・実験を含む)
前期	人間文化学部	日本文学論特論 A	導入 ・ 未導入	<input type="checkbox"/> a. フィールドワーク <input type="checkbox"/> b. 体験学修 (現地体験, 地域活動) <input type="checkbox"/> c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修 <input type="checkbox"/> d. その他の行動型手法 (実習・実技を含む) <input type="checkbox"/> e. ミニッツペーパー <input type="checkbox"/> f. 振り返り <input type="checkbox"/> g. プレゼンテーション <input type="checkbox"/> h. グループワーク <input type="checkbox"/> i. ディスカッション <input type="checkbox"/> j. テイベート <input type="checkbox"/> k. ワークシヨップ <input type="checkbox"/> l. PBL <input type="checkbox"/> m. TBL <input type="checkbox"/> n. 双方向授業 <input type="checkbox"/> o. 反転授業 <input type="checkbox"/> p. その他の参加型手法 (演習・実験を含む)
後期	人間文化学部	日本文学論 A (国文学)	導入 ・ 未導入	<input type="checkbox"/> a. フィールドワーク <input type="checkbox"/> b. 体験学修 (現地体験, 地域活動) <input type="checkbox"/> c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修 <input type="checkbox"/> d. その他の行動型手法 (実習・実技を含む) <input type="checkbox"/> e. ミニッツペーパー <input type="checkbox"/> f. 振り返り <input type="checkbox"/> g. プレゼンテーション <input type="checkbox"/> h. グループワーク <input type="checkbox"/> i. ディスカッション <input type="checkbox"/> j. テイベート <input type="checkbox"/> k. ワークシヨップ <input type="checkbox"/> l. PBL <input type="checkbox"/> m. TBL <input type="checkbox"/> n. 双方向授業 <input type="checkbox"/> o. 反転授業 <input type="checkbox"/> p. その他の参加型手法 (演習・実験を含む)
後期	人間文化学部	日本文学論演習 A	導入 ・ 未導入	<input type="checkbox"/> a. フィールドワーク <input type="checkbox"/> b. 体験学修 (現地体験, 地域活動) <input type="checkbox"/> c. 他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修 <input type="checkbox"/> d. その他の行動型手法 (実習・実技を含む) <input type="checkbox"/> e. ミニッツペーパー <input type="checkbox"/> f. 振り返り <input type="checkbox"/> g. プレゼンテーション <input type="checkbox"/> h. グループワーク <input type="checkbox"/> i. ディスカッション <input type="checkbox"/> j. テイベート <input type="checkbox"/> k. ワークシヨップ <input type="checkbox"/> l. PBL <input type="checkbox"/> m. TBL <input type="checkbox"/> n. 双方向授業 <input type="checkbox"/> o. 反転授業 <input type="checkbox"/> p. その他の参加型手法 (演習・実験を含む)

ご協力ありがとうございます。  
引き続き「CLALの導入に係る意識調査」(同封別紙)にもぜひご協力をお願いします。

## 平成 27 年度 CLAL の導入に係る意識調査

この調査は、本学 AP 事業で推進する県立広島大学型アクティブ・ラーニング（Campus Linkage Active Learning：CLAL）の導入に係る教員の意識を把握し、現状と課題を探ることを目的として、平成 27 年度の開講科目を担当している教員（非常勤講師を含む）を対象として行うものです。

並行して依頼しております「平成 27 年度 担当科目における CLAL 導入状況調査」（以下「導入状況調査」とする。）では、担当科目毎に CLAL の導入状況を把握することを趣旨としていますが、この調査は CLAL の導入に対する教員一人ひとりの意見を伺うことに主眼を置いています。

ご回答いただいた調査結果は、「導入状況調査」と同様に、AP 事業推進部会が責任をもって管理し、CLAL の推進や AP 評価委員会への報告等に活用いたします。

以上の趣旨をご理解いただき、ご協力賜りますようお願いいたします。なお、この調査へのご協力は【任意】としております。

ご協力をいただける方は、お忙しいところ恐縮ですが、平成 28 年 2 月 15 日（月）17:00 までにご回答くださるようお願いいたします。

AP 事業推進部会長 馬 本 勉

❖ 提出締切：平成 28 年 2 月 15 日（月）17：00

❖ 提出先：広島キャンパス：メール室（回収 BOX を設置）  
庄原キャンパス：教学課 AP 担当  
三原キャンパス：教学課 メールボックス

❖ 問合わせ先：本部教学課教務係 伊藤（AP 事務担当）  
電子メールアドレス s-itou13039@pu-hiroshima.ac.jp  
電話番号 082-251-9710（内線 1188）

### ◎ 氏名および所属を教えてください。

氏名	
所属 数字を○で囲んでください。	1 人間文化学部 国際文化学科      2 人間文化学部 健康科学科
	3 経営情報学部 経営学科            4 経営情報学部 経営情報学科
	5 生命環境学部 生命科学科        6 生命環境学部 環境科学科
	7 保健福祉学部 看護学科            8 保健福祉学部 理学療法学科
	9 保健福祉学部 作業療法学科       10 保健福祉学部 コミュニケーション障害学科
	11 保健福祉学部 人間福祉学科
	12 総合教育センター                    13 学術情報センター
	14 地域連携センター                    15 国際交流センター
	16 非常勤講師

### 問 1. CLAL の導入状況を教えてください。

平成 27 年度の担当科目で CLAL を導入している（300 分以上アクティブ・ラーニングを実施している）授業はありますか。当てはまる数字を○で囲んでください。

- 1 全ての授業で導入している。 → 問 2 および 問 4 をお答え下さい。  
2 一部の授業で導入している。 → 問 2、問 3 および 問 4 をお答えください。  
3 全ての授業で導入していない。 → 問 3 および 問 4 をお答え下さい。

**問2. 問1で「1」または「2」と答えた方にお聞きします。**

[ア] アクティブ・ラーニングの実施による、学生の学修に対する効果をどのように感じていますか。当てはまる欄に○を入れてください。

	1 そう思う	2 どちらとも いえない	3 そう思わない
学修内容の理解度が上がった			
授業への参加が積極的になった			
質問が増えた			
授業外の学修時間が増えた			
レポート等、課題の質が向上した			
遅刻・早退・欠席が減った			
私語が減った			
居眠りが減った			

[イ] その他、感じている効果等があれば具体的にお聞かせください。

**問3. 問1で「2」または「3」と答えた方にお聞きします。**

[ア] CLALを導入していない理由について、当てはまる欄に○を入れてください。

	1 そう思う	2 どちらとも いえない	3 そう思わない
授業の内容上導入が難しい			
大人数の授業であるため			
事前・事後の作業時間が増える			
講義に充てる時間が減る			
教育効果があると思わない			
周囲も導入していない			
手法がわからない			
面倒である			
なんとなく			



## CLAL 導入状況調査 集計結果

平成 28 年 2 月 29 日

### 1 調査期間

平成 28 年 1 月 29 日（金）～2 月 15 日（月）

### 2 対象科目

総科目数 1134 科目

- ① 平成 27 年度「授業評価アンケート」のデータベースに登録されている科目
- ② ①の科目のほか、履修者数が 5 人以下の科目

### 3 調査対象者

対象科目を担当する常勤および非常勤の教員 284 名  
（複数人が担当する科目は、代表担当者に回答を依頼）

### 4 調査方法

- ①常勤教員：各キャンパスで配付・回収
- ②非常勤教員：調査票を郵送し、返信用封筒にて返送を依頼

### 5 回収率

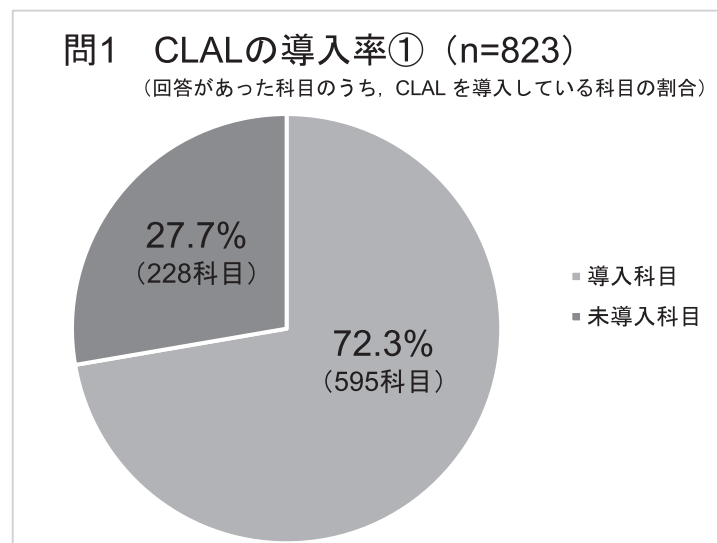
68.0%（193 人／284 人）

### 6 調査結果

**問 1** CLAL の導入状況について、該当するほうに○を付けてください。

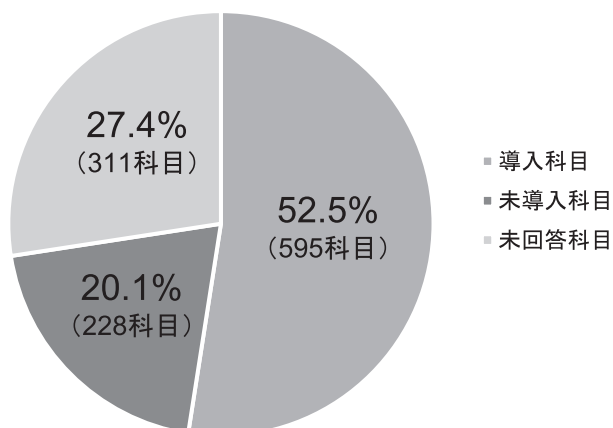
〔(例) 1 学期の授業時間のうちアクティブ・ラーニング実施時間が 300 分以上 → 導入  
〃 300 分未満 → 未導入〕

	科目数
調査対象科目	1134
導入科目	595
未導入科目	228
未回答科目	311



### 問1 CLALの導入率② (n=1134)

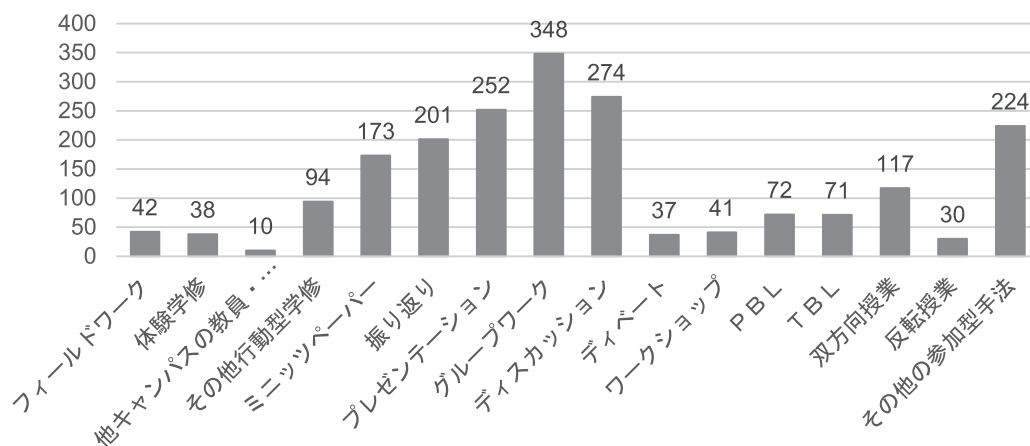
(全対象科目のうち、CLALを導入している科目の割合)



問2 問1で「導入」とした科目について、実施しているアクティブ・ラーニングの手法を教えてください。回答の選択肢a～pの中から、該当するもの全てにチェックを入れてください。

手法	件数
a.フィールドワーク	42
b.体験学修	38
c.他キャンパスの教員・学生との交流を伴う学修	10
d.その他行動型学修（実習・実技を含む）	94
e.ミニッツペーパー	173
f.振り返り	201
g.プレゼンテーション	252
h.グループワーク	348
i.ディスカッション	274
j.ディベート	37
k.ワークショップ	41
l.PBL	72
m.TBL	71
n.双方向授業	117
o.反転授業	30
p.その他の参加型手法（演習・実験を含む）	224

### 問2 導入手法（複数回等）



## CLAL意識調査 集計結果

平成 28 年 2 月 29 日

### 1 調査期間

平成 28 年 1 月 29 日（金）～2 月 15 日（月）

### 2 調査対象者

平成 27 年度開講科目を担当する常勤および非常勤の教員 284 名

### 3 調査方法

①常勤教員：各キャンパスで配付・回収

②非常勤教員：調査票を郵送し、返信用封筒にて返送を依頼

### 4 回収率

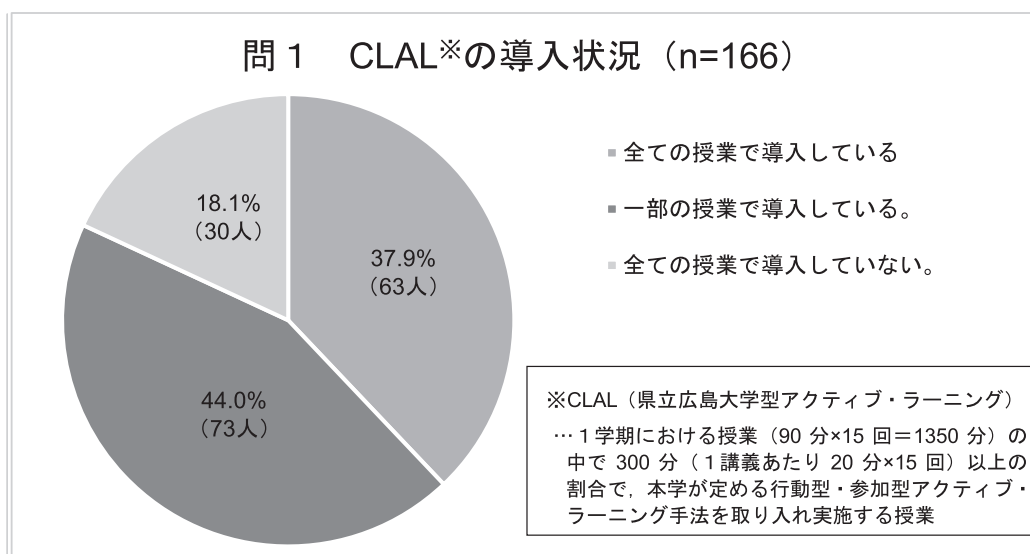
62.7%（178 人／284 人）

### 5 調査結果（自由記述の問を除く）

#### 問 1 CLAL の導入状況を教えてください。

平成 27 年度の担当科目で CLAL を導入している（300 分以上アクティブ・ラーニングを実施している）授業はありますか。当てはまる数字を○で囲んでください。

	回答数	割合
全ての授業で導入している	63	38.0%
一部の授業で導入している。	73	44.0%
全ての授業で導入していない。	30	18.0%
合 計	166	100%



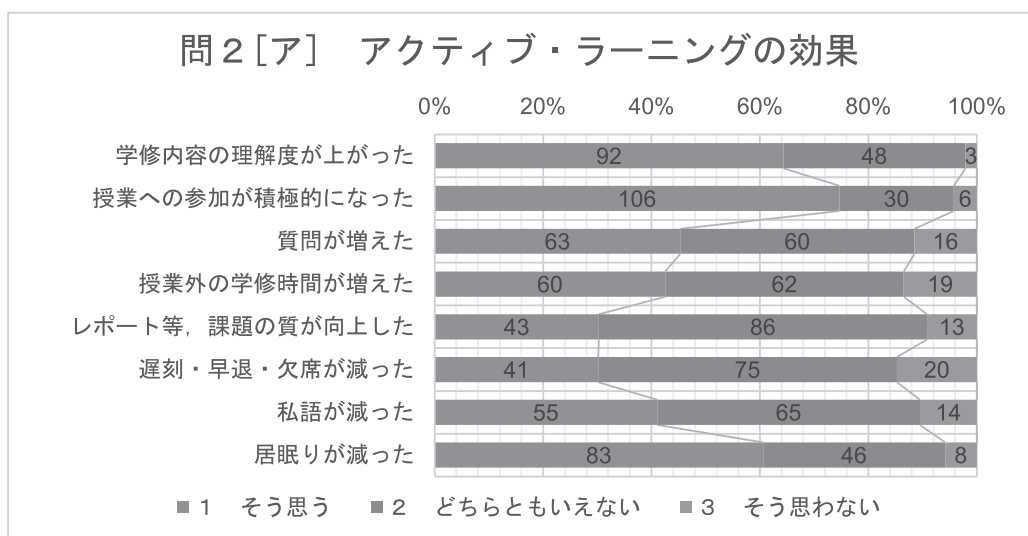


問2 問1で「1」または「2」と答えた方にお聞きします。

[ア] アクティブ・ラーニングの実施による、学生の学修に対する効果をどのように感じていますか。当てはまる欄に○を入れてください。

上段：割合／下段：回答数

	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	合計
学修内容の理解度が上がった	64.3% (92)	33.6% (48)	2.1% (3)	100.0% (143)
授業への参加が積極的になった	74.6% (106)	21.1% (30)	4.2% (6)	100.0% (142)
質問が増えた	45.3% (63)	43.2% (60)	11.5% (16)	100.0% (139)
授業外の学修時間が増えた	42.6% (60)	44.0% (62)	13.5% (19)	100.0% (141)
レポート等、課題の質が向上した	30.3% (43)	60.6% (86)	9.2% (13)	100.0% (142)
遅刻・早退・欠席が減った	30.1% (41)	55.1% (75)	14.7% (20)	100.0% (136)
私語が減った	41.0% (55)	48.5% (65)	10.4% (14)	100.0% (134)
居眠りが減った	60.6% (83)	33.6% (46)	5.8% (8)	100.0% (137)



[イ] その他、感じている効果等があれば具体的にお聞かせください。(回答抜粋)

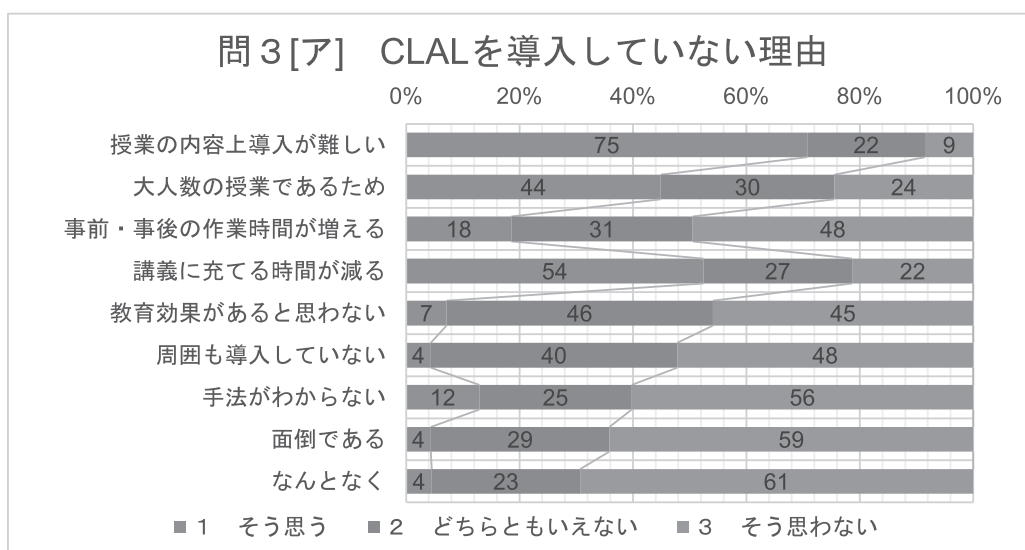
- 主体的に行動することで、学生自身が課題を自らの視点から捉えることが可能になると思います
- 学生は自分ならではの表現を披露する喜びを感じられるようです。そして、適度の緊張感をもたらせることにより、私語や、居眠りはほとんどなくなりました
- クラスメイト同志のコミュニケーションが活発化したように感じます
- 実際に行うことで、理論の具体化ができる。実践により、留意点を学生自らが見出すことができる
- 楽しく演習が行えている。学生が目的意識を持って取り組んでいるように見える
- 学生がイキイキし、積極的に興味を持つようになる
- Students love doing presentations when they can choose their topic. They like to work in groups because it is less scary at presentation time.
- 熱心な学生は益々熱心になり、そうでない学生はわずかだがとりくみも意欲も変化しない者がいる
- アクティブ・ラーニングを導入することで学生の負担が大きくなり過ぎている。アクティブ・ラーニングの弊害について検討すべきと考える

問3. 問1で「2」または「3」と答えた方にお聞きします。

[ア] CLALを導入していない理由について、当てはまる欄に○を入れてください。

上段：割合／下段：回答数

	そう思う	どちらとも いえない	そう思わない	合計
授業の内容上導入が難しい	70.8% (75)	20.8% (22)	8.5% (9)	100.0% (106)
大人数の授業であるため	44.9% (44)	30.6% (30)	24.5% (24)	100.0% (98)
事前・事後の作業時間が増える	18.6% (18)	32.0% (31)	49.5% (48)	100.0% (97)
講義に充てる時間が減る	52.4% (54)	26.2% (27)	21.4% (22)	100.0% (103)
教育効果があると思わない	7.1% (7)	46.9% (46)	45.9% (45)	100.0% (98)
周囲も導入していない	4.3% (4)	43.5% (40)	52.2% (48)	100.0% (92)
手法がわからない	12.9% (12)	26.9% (25)	60.2% (56)	100.0% (93)
面倒である	4.3% (4)	31.5% (29)	64.1% (59)	100.0% (92)
なんとなく	4.5% (4)	26.1% (23)	69.3% (61)	100.0% (88)



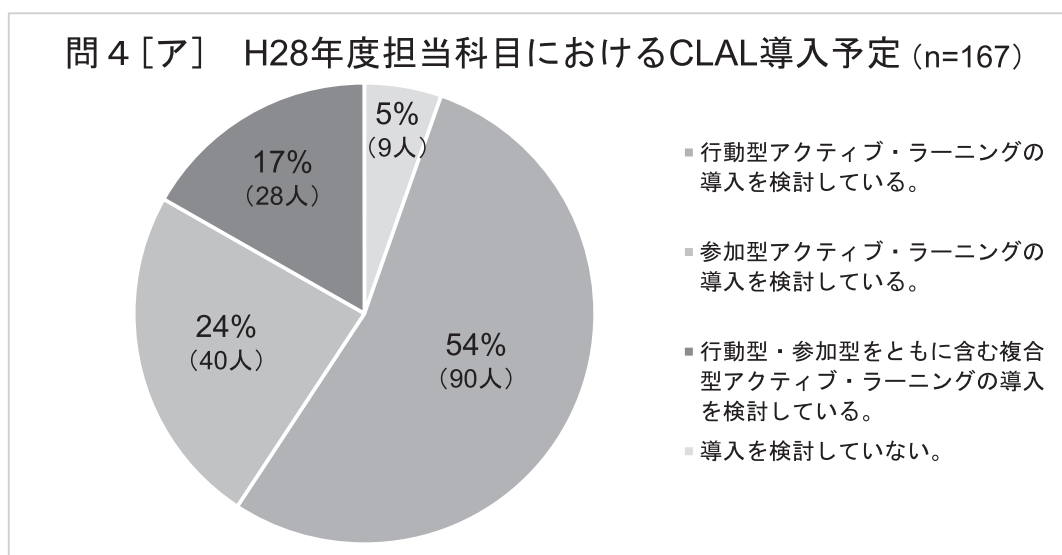
[イ] その他の理由があれば自由にお聞かせください。(回答抜粋)

- 基礎科目でCLALを導入しても、知識や考え方がわからない為、無駄になるのではと考えている。また、必修科目では、学生間のモチベーションに大きな差があるため、導入しても一部学生に負担がかかる
- テキストを読み、知識・読書経験を積ませる授業では、グループワークに時間をかけすぎると時間が足りなくなる。導入していないわけではなく、300分以下で最後に発表会を開いている
- 指導上の準備が必要なのは負担である。起こりうるトラブル等に対してできるだけ対応策を練り、現場で立ち往生しないようにする必要があるから
- 概説的な授業をと要求されるので限定された形でしか導入できない。どうしても板書が必要となる
- オムニバス授業で各教員が1~2コマの担当なので現在は実施導入していない。担当教員数が多い。今後オムニバス教員間の同意形成ができれば導入したい
- 国家試験の必修科目が、教えるべき知識の分量を鑑みると一定時間をCLALに割り当てるのが不可能であるため

問4. 全ての方にお聞きします。

[ア] 平成28年度の授業におけるCLALの導入予定について、当てはまるものに○を付けてください。

	回答数	割合
1 行動型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。	9	5.4%
2 参加型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。	90	53.9%
3 行動型・参加型をともに含む複合型アクティブ・ラーニングの導入を検討している。	40	24.0%
4 導入を検討していない。	28	16.8%
合 計	167	

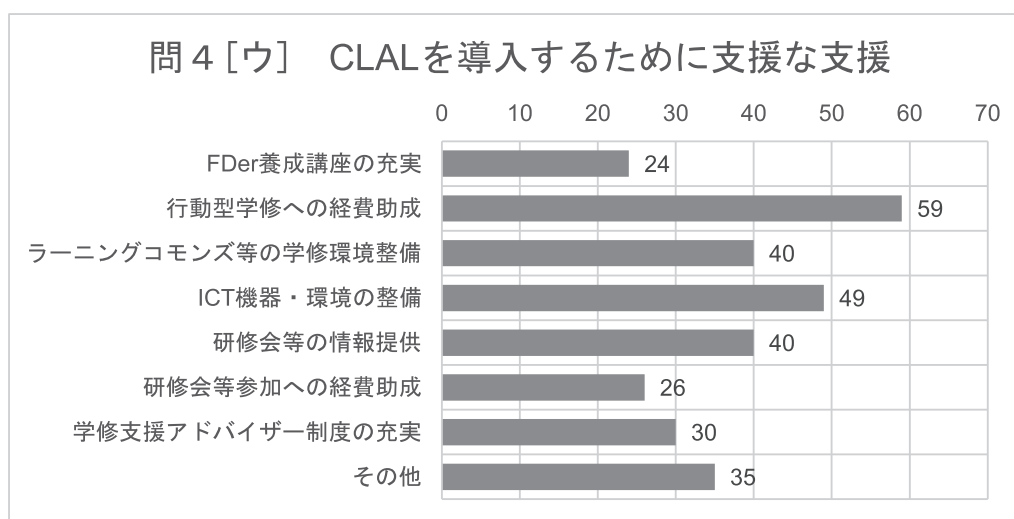


[イ] [ア] の回答理由を具体的にお聞かせください。(回答抜粋)

問4 [ア]	問4 [イ]
1	決まった答えのない課題に取り組む事で、授業内容の理解と使い方を体感することができるため。
1	授業中の学生の取組姿勢を積極的にするため
2	効果があり、かつ学生も好んでいるため。
2	自学自習の時間の確保のため
2	教室外(特に学外)の場合、相手先との調整等が必要となるため
2	座学のみで片寄りやすい語学の授業に緩急をつけるのに、とても良い方法だと思うので
3	「参加型」はすでに導入している。「行動型」も一部導入したいと考えているが、受講生の数や質に基づいて判断する。
3	学生の質、授業内容にフィットした独自のアクティブ・ラーニングの開発を模索したい
4	導入することで、どのような型で授業を行っていったらよいのか分からないため
4	選択科目にもかかわらず、100名前後(生命科学科1学年分)の学生がおり、300分(4コマ分)以上のCLALの導入は考えられない
4	導入できるほど理解できていないため

[ウ] CLALを導入するための支援について、必要だと思うものにチェックを入れてください。(複数回等可)

	回答数
FDer 養成講座の充実	24
行動型学修への経費助成	59
ラーニングcommons等の学修環境整備	40
ICT 機器・環境の整備	49
研修会等の情報提供	40
研修会等参加への経費助成	26
学修支援アドバイザー制度の充実	30
その他	35
合 計	303



■ 選択肢「その他」自由記述 (抜粋)

- 経費助成はよいが、手続きが大変で利用しようと思わない
- 学生への説明。なぜアクティブラーニングが必要なのか？学生は勉強することに対し、嫌悪感を示している→必要だと思っていない学生が多い
- フィールドワーク、体験学修にはTAが必要だと思う
- アクティブ・ラーニング (CLAL) を充実させるためには、教員だけでなく、学生自身もその意義を認識する必要がある。学生への取り組みも必要
- 本格的なFD研修、初年次の学生向けのファシリテーション関連講座、学内成功性 (or 失敗例) のシェア
- TA・RAの配置
- 教員間の協力
- 固定テーブルではなく、移動可能なテーブル付のイスへの変更⇒学修環境の整備 例：南山大学などはじゅうたん敷きの部屋になっていて、振返りがし易い、など
- 導入事例の紹介などがあるとよいと思います
- 学生の授業外の学習時間の倍増が可能な環境整備
- TBLを行うための環境 (iPadやマークシートをその場で解析しプロジェクトで見せるなど 即応性のある授業ができる環境) をつくってほしい
- FD研修会が多すぎると授業の準備の時間が少なくなるのでヒントとなる研修会を精選していただき、準備の時間を増やしたい
- 教員同士の情報交換・意見交換

## ■■ F Der（ファカルティ・ディベロッパー）の養成について ■■

平成 27 年度から、県立広島大学における F Der の定義・役割を定め、養成を開始した。

### 【定義】

担当授業等においてアクティブ・ラーニングを実践し、学科内の他の教員へアクティブ・ラーニングに関する指導・助言を行うとともに、本学におけるアクティブ・ラーニングの普及・浸透に努める者。

### 【F Der の役割】

- 自身の担当する授業においてアクティブ・ラーニングを取り入れ、授業改善を行う。
- 他の教員が担当する授業について、ピアレビューや助言を行う。
- 学科内及び学内における普及・浸透のため、事例発表や先進事例調査を行う。
- アクティブ・ラーニングの視点から、学科のカリキュラムに提言を行う。

### 【F Der の指定（候補者）及び認定条件】

F Der は次の者を指定（候補者）とする。

- ① AP 事業推進部会の部会員教員
- ② 行動型学修に係る経費助成事業に採択された教員
- ③ 先進事例調査に係る助成対象教員
- ④ 学部代表部会員からの推薦教員（各学科 1 名）

### 【F Der の指定（候補者）及び認定条件】

条件		指定された年度において開催される年 4 回の F Der 養成講座を受講した者【年度ごとに養成】
養 成 者 数	H 2 7 年度	1 5 名
	H 2 8 年度	1 0 名（計 2 5 名）
	H 2 9 年度	5 名（計 3 0 名）

※講座を受講できなかった者については、DVD の貸出により対応する。

### 【F Der 養成講座実施状況】

内容	日時	テーマ
第 1 回	平成 27 年 9 月 14 日(月) 15:00~17:30	アクティブ・ラーニングとファカルティ ディベロッパーについて
第 2 回	平成 27 年 12 月 1 日(火) 16:20~17:50	アクティブ・ラーニングの具体的手法の導入
第 3 回	平成 28 年 2 月 19 日(金) 14:00~16:00	アクティブ・ラーニングの実践的技法を学ぶ
第 4 回 (教育改革フォーラム)	平成 28 年 3 月 4 日(金) 14:00~17:30	アクティブ・ラーニングの導入と評価

講座の内容（講演資料）は p.38~45 のとおり。

## ■■学修支援アドバイザー養成について■■

平成 27 年度から、学修支援アドバイザーの定義・役割を次のとおり定め、学生募集を開始すると共に、教職員の理解を深めるためのFD研修および学生向けの研修を開始した。

### 【定義】

授業内外において本学学生への学修支援を行う学生であり、他者の学びを支援すること等を通じて、自身が学ぶ喜びを感じ、生涯学び続けるアクティブ・ラーナーを目指す者。

### 【学修支援アドバイザーの役割】

- ① 所定の日にラーニングコモンズに待機し、学生の学修相談に応じる。
- ② 文献検索や課題作成、PC等機器の操作について支援を行う。  
(現在の図書館の学修支援アドバイザーの役割)
- ③ 自身が得意とする教科の学習指導(リメディアル教育)を行う。
- ④ 学修支援や学習指導を内容とする学内イベントを企画・実施する。
- ⑤ 担当教員の指示を受けて、事前学修を含む授業外学修のサポートや、授業(演習、実験及び実習を含む)内での授業運営支援を行う。
- ⑥ 授業計画の策定の際に、教員の求めに応じて、授業改善に資する意見を述べる。
- ⑦ 他者を支援・指導する立場として、知識・見識を広めるための努力をする。

### 【役割および活動場所】

	学修相談・学習指導に係る活動	授業支援に係る活動	その他
<b>役割(活動場所)</b>	① ② ③ ④ (ラーニングコモンズ)	⑤ ⑥ (講義室等)	⑦ (学内外)

### 【活動内容(例)】

<b>学修相談 学習指導</b>	①	・ラーニングコモンズに待機し、学修の悩みについて相談を受ける。
	②	・希望学生に対して、文献・資料の検索や、レポートの作成を支援する。 ・PCや電子黒板を使用する際に、操作を補助する。
	③	・希望学生に対して、高校の内容を中心とした教科学習の指導をずる。
	④	・学生を対象に、資料検索やレポート作成についての講習会等を開催する。
<b>授業支援</b>	⑤	・授業外において、事前課題の作成をサポートする。 ・授業内において、グループ討議のファシリテーションをする。
	⑥	・授業期間終了後、受講者の視点から、授業への要望を教員に伝える。
<b>その他</b>	⑦	・学内外で行われる講座やセミナーに積極参加する。 (参加に係る費用は、上限を設けた上でAP予算において負担する。)

### 【雇用条件】

時給：890円/任期：卒業(大学院生の場合は修了)するまで継続可

### 【学修アドバイザー養成講座(教員向けFD)実施状況】

内容	日時	テーマ
第1回	平成 27 年 12 月 24 日 (木) 13:30~16:30	学生による学修支援 ～大学教育における役割を考える～
第2回	平成 28 年 2 月 18 日 (木) 14:40~16:10	アクティブ・ラーニングの具体的手法の導入

講座の内容(講演資料)は p.47~63 のとおり。

### 【学修アドバイザー養成講座(学生向け)】

平成 28 年 3 月 24 日 (木) 10:40~14:30

## ■■広報活動および学内外からの意見聴取について■■

本学のAP事業について、学内外に広くその内容を周知するため、教育改革フォーラムの開催のほか、次のとおり広報活動を行った。

### (1) AP事業推進部会ニュース（リーフレット）の発行

「県立広島大学AP事業推進部会ニュース」VOL.1 (P.85～88)

「県立広島大学AP事業推進部会ニュース」VOL.2 (P.89～92)

＜リーフレット配付先＞

学内教職員、学生、学内研修会参加者、同窓会、後援会、オープンキャンパス／大学説明会参加者、サテライトキャンパスへの設置など

### (2) 研修会等での事例発表

	内容	日程	場所	内容
1	SPODフォーラム2015	H27.8.26～28	愛媛大学 (愛媛県)	ポスター発表 ※1
2	平成27年度教育改革ICT 戦略大会	H27.9.4	アルカディア市ヶ谷 (東京都)	事例発表 ※2
3	比治山大学・比治山大学短期大学部 平成27年度AP第2回セミナー	H28.3.3	比治山大学 (広島県)	事例発表
4	AP事業成果発表 ジョイントフォーラム2016	H28.3.14	YIC Studio (山口県)	事例発表

※1 ポスター発表資料「行動型、参加型アクティブ・ラーニングとFD、SD」(p.93)

※2 講演発表資料「地域社会での活躍を目指したアクティブ・ラーニングによる人材育成」(p.94～105)

### (3) 大学ホームページ掲載

大学ホームページ

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/>

AP特設ページ

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/~umamoto/ap/>

### (4) ステークホルダーへの意見聴取

平成26年10月 本学ステークホルダーアンケート実施（法人実施）

平成27年6月 後援会総会にて事業リーフレットを配布し、意見聴取

平成27年12月 同窓会にて事業リーフレットを配付し、意見聴取

### (5) その他

日本学術振興会 大学教育再生加速プログラム委員会事務局

平成26年度大学教育再生加速プログラム（AP）取組内容等パンフレット (p.106)

<http://www.jsps.go.jp/j-ap/data/h26AP-program.pdf>



平成26年度文部科学省大学教育再生加速プログラム(テーマI)選定事業

# 生涯学び続ける自律的な アクティブ・ラーナーの育成をめざして

## ■ 知の創成拠点としての能動的学修の推進

県立広島大学長 中村 健一



県立広島大学は、2005年、広島市、三原市、庄原市に存在した広島県内の3大学統合により、「地域に根ざした、県民から信頼される大学」を基本理念とした新大学の歩みを開始しました。以来、10年間の地域との関わりにおいて、県民に信頼される上で最も大切なミッションは、地域に誇りうる確かな人材育成にあるという確信に至りました。そのため、2013年度よりスタートした第二期中期目標においては、「グローバル化が進む社会経済環境の中で、企業や地域社会において活躍できる実践力のある人材の育成」をトップスローガンに掲げ、全学を挙げて教育への取り組みがなされています。

その実現にあたっては、教育改革推進委員会を学長直轄として設け、教育改革の推進を進めています。実施過程で得られた共通意識は、グローバル化の進展した社会において、大学教育に求められているのは、『命題知』を古典的に修得させる従来の教育に留まらず、『応用知』あるいは『実践知』の涵養が極めて重要であるという認識でした。

能動的学修の推進はそうした目的を果たす上で求められる必然的活動であり、能動的学修推進に焦点化した取組への検討がなされました。その結果、フィールドワークなどの教室外の学修に基づいた行動型学修と、双方向授業や反転授業など教室内での知的能動性を育む参加型学修の融合を基本とした、能動的学修教育プログラムを構築することができました。幸いこの教育プログラムは、平成26年度の文部科学省助成事業である「大学教育再生加速プログラム」の採択に至り、現在着実にその推進がなされています。私達は、学内外の多くの方のご協力の下、全国大学の先駆的模範例となる、効果的な能動的学修を推進する実践活動を目指しています。皆様からの幅広いご支援を宜しく願います。

## ■ 県大流 学びのスタイルとは

AP事業推進部会 西本 寮子



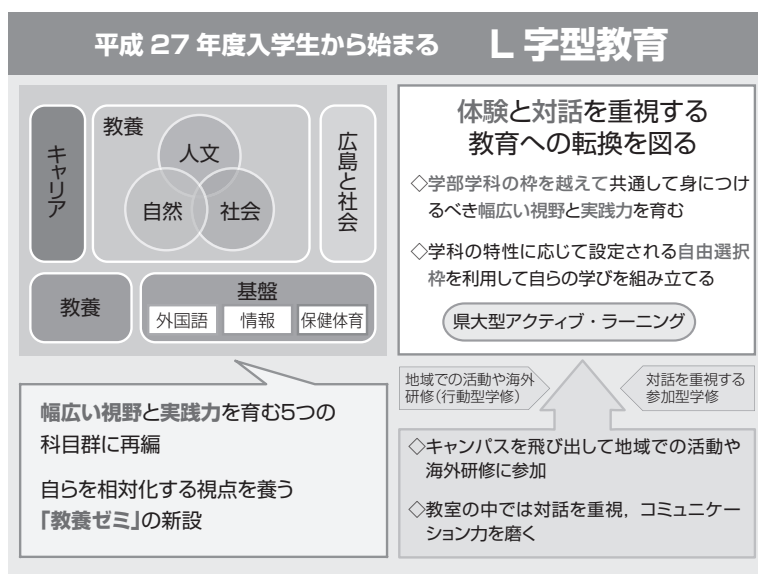
ますます多様化、複雑化し、先が見えない現代社会にあって、答えのない課題に果敢に立ち向かう力を身につけることが大学教育に求められています。本学では、特色ある4つの学部で学ぶ学生たちが生涯にわたって学び続けるアクティブ・ラーナーとしての資質を身につけられるようアクティブ・ラーニングを計画的に導入します。

対話を重視した双方向授業を取り入れるアクティブ・ラーニングの方向性はふたつ。時には教室を飛び出して地域の課題と向き合う行動的学修、ディスカッションなどを通じて意見を交わし、なにより自己との対話を通じて主体的に学ぶ意欲を引き出す参加型学修。これにより学生たちの知的能動性を揺り動かし、深い学びを喚起します。それぞれ100km離れた3つのキャンパスと広島市内中心にあるサテライトキャンパスを舞台として学生の主体的学びを引き出す能動的学修、それが私たちがめざす県大型アクティブ・ラーニングのかたちです。



## 平成 27 年度から新しい共通教育が始まります。

アクティブ・ラーニング科目を全学年で開講する 3 種の体系的な学士教育課程プログラム (①全学共通教育 ②専門教育 ③領域横断・学部横断型教育プログラム) を導入します。幅広い履修を可能とする仕組みから学生が自らの学びを選択することで、みなさんの知的能動性を引き出し、みなさん自身が深い学びを実感できる自律的な学びのスタイルの獲得をめざしています。



### 行動型学修



### 参加型学修



### ① 全学共通教育

全学共通教育では、主として「幅広い教養」を身につけることを目的としています。

大学教育全体の「基盤・基礎」にあたるコア科目群、自らの専門領域に偏らない「教養」を身につける科目群を、バランスよく配置しています。例として以下のような科目を開講しています。

**大学基礎セミナー** 大学における勉学の進め方の基本となる主体的・能動的学修に必要な技能を修得し、課題解決のための思考能力を培います。

**地域情報発信論** 中国新聞社の御協力を得て、地域に密着したテーマについて取材・記事の編集・発信に至る一連の流れを体験しながら、情報の発信力を身につけます。



全学共通教育科目「地域の理解」における安芸高田の神楽の体験

### ② 専門教育

それぞれの特色と強みを生かし、「高度な専門性」を担う各学部・学科の専門教育では、平成 25 年度からミッションに沿った教育課程の体系化を進めています。

### ③ 領域横断・学部横断型教育プログラム(Campus-Linkage Program)

従来の教養教育・専門教育という区分や学問領域に捉われず、学生が専門教育と並行して自らの学びを選択することで、幅広い視野やグローバルな視点を育て、関連領域の学びを促進するためのプログラムです。一例として以下のようなプログラムがあります。

#### 異文化間コミュニケーション認定プログラム

多様化する国際社会において、文化的背景の異なる人々と共に未来を切り拓いてゆける、異文化に対する理解力やコミュニケーション能力を身につけた人を育成します。

## 生涯学び続けるアクティブ・ラーナーになるために

大学での学修が高校までの勉強と大きく異なる点は、周りが与えてくれるものを吸収するスタイルから、問題意識を持って自発的に課題に取り組む姿勢が不可欠になるということです。

高校時代と同じようにびっしりと時間割を埋めることは、お勧めできません。できれば空き時間をいくつかつくっておきましょう。その時間に予習・復習したり、図書館や情報処理演習室で必要な文献を調べたり、先生の研究室を訪ねたり、わからない問題を友達と相談したりできるからです。

大学で授業を受けるうえで肝心なことは、多様な授業スタイルに慣れること、授業ごとに異なるルールを知ること、積極的に授業に参加することです。

単位を取ることは大学を卒業するために必要なことですが、それ自体が目的ではありません。本当に大事なことは、「授業を通してあなたの知識、技術、態度、価値観、感性を磨くこと」です。そして、学ぶおもしろさを感じることです。

### 単位制度と学修時間について

#### ◆ 大学における学修時間の定義

・学生の学修時間(大学設置基準 第21条)



・日常時間と大学時間

日常の1時間 = 60分

本学の1時間 = 45分

県立広島大学：1時間45分 ⇒ (90分×15回) + 授業時間の倍の自習 ⇒ 2単位

#### ◆ 学生の学修時間

・半期20単位の場合(2単位90分)

大学における学修時間	自学自習時間	一週間の学修総量	一日の学修量
900分(15時間)	1,800分(30時間)	2,700分(45時間)	540分(9時間) ※週5日間の学修

- 日本の大学のカリキュラムは上記の前提に基づいています。それぞれの授業で授業時間外に行う課題が出されます。しかし、教員は手取り足取り教えてくれるわけではありません。大学の授業は、教員の話を一方向的に聴いていけばよいのではなく、自ら主体的に学修し、自分自身で対話する姿勢を身に付けましょう。
- 自発的に学ぶことは、自分の頭で考える習慣を身につけることです。そして学ぶ習慣をつけることは、大学を卒業後、どんな仕事に就いても不可欠となる要素です。自発的に学ぶ習慣は、大学での学修活動に利用できるだけでなく、卒業後の人生においても役立ちます。

【参考図書】近田政博「学びのティップス大学で鍛える思考法」玉川大学出版部、2009年

## 1 目的

地域に軸足を置き世界を視野に活躍できる人材の育成拠点として、本学が掲げる人材育成目標の実現のために全学で取り組んでいる教育改革のうち、授業方法の見直し・改善と教育方法の充実・転換を目指したアクティブ・ラーニングの導入を加速し、学生の学修意欲を喚起し、主体性をはぐくむ教育を定着させることを目的としています。

## 2 具体的な実施内容

### (1) 体系的に組み立てられた学士課程教育プログラムとアクティブ・ラーニング

全学共通教育は、大学教育の基盤をなす科目群と豊かな教養を身につける科目群に再編して、自らの学びを選択する仕組みを加えて、平成 27 年度からスタートします。

### (2) 「主体的な学びを育む能動的学修」の実現を目指す「行動型学修」と「参加型学修」

「主体的な学びを育む能動的学修」を実現するため、教室の外で積極性を身につける「行動型学修」と教室内の学修で知的能動性を揺り動かす、深い学びを喚起する「参加型学修」を、教育目標と教育内容に沿って計画的に取り組むことで学びの質を向上させることを目指しています。

### (3) 「支え合い、学び合う」人材育成の仕組み

授業改善を実践し、組織的・継続的に教育の質的改革をけん引するファカルティ・ディベロッパーを養成し、教員同士が支え合い・学び合う仕組みを構築します。



H26 年度教育改革フォーラム (H27.3.7)  
学生による公開ディベート

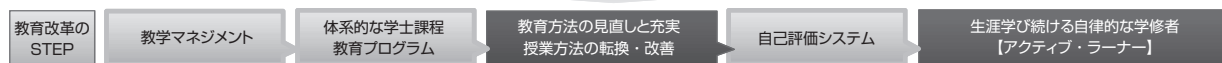
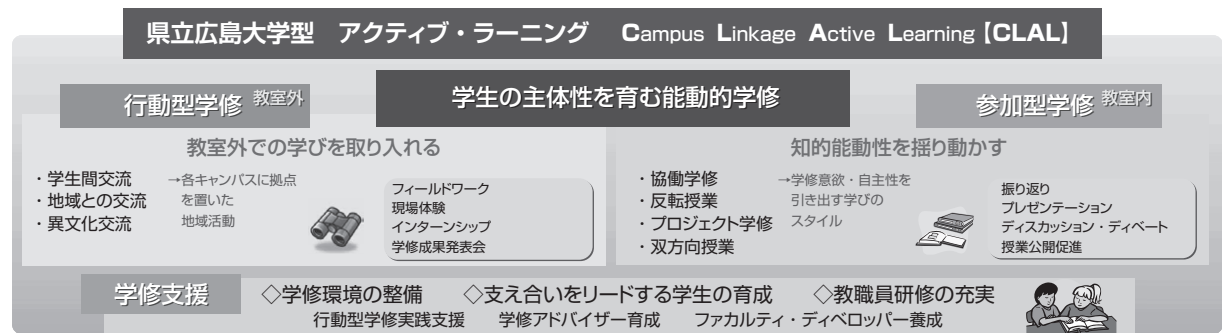
## 3 事業期間

平成 26 年度～平成 29 年度(4 年間)

## 4 取組概要

大学等名 **県立広島大学**      テーマ **テーマI (アクティブ・ラーニング)**

**取組概要** 地域活動を組み込み、主として教室外で行う「行動型学修」と、学修者の知的能動性を揺り動かす深い学びを喚起する「参加型学修」を組み合わせた「能動的学修」を学士課程教育に計画的に導入して教育改革を進める全学的な取組である。これにより、幅広い教養と高度な専門性を備えた人材を育成し、生涯にわたり学び続ける自律的な学修者アクティブ・ラーナーの育成を目指す。



数値目標		25 年度	29 年度
	アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合*		100%
ファカルティ・ディベロッパー養成		0 人	30 人
学修アドバイザー育成		0 人	55 人

\*29 年度の数値目標はアクティブ・ラーニングを再定義した上での値である

学長のリーダーシップの下、教育改革に取り組む。本学での学びに対する学生の満足度を高め、卒業生の活躍により地域への波及効果を狙う。

- 教室外での学びを取り入れ、学修意欲・自主性を引き出す新たな教授法による授業外学修の充実を加速する。
- 知識を活かせる人材の育成を目指して、真の問題発見力や課題解決力、論理的思考力を育む。
- FD・SD 活動の充実により、教職員の意欲を向上させる。目標を共有し、教育の質的改善に全学的・組織的に継続して取り組む。
- 学生同士が教え合うことで、学びを定着させる。

本学の取組に関するお問い合わせは、以下へお願いします。

県立広島大学 AP 事業推進部会

〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目 1-71  
e-mail kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp





## 生涯学び続ける自律的な アクティブ・ラーナーの育成をめざして

AP事業推進部会長 馬本 勉

今年度よりAP事業推進部会長を務めることとなりました。「アクティブ・ラーニング」という言葉を全学に浸透させ、形あるものとするべく力を尽くして参ります。ご協力のほど、よろしくお願ひいたします。

私たちは、県大型アクティブ・ラーニングを「CLAL (Campus Linkage Active Learning)」と呼んでいます。約100キロというキャンパス間の距離は、マイナス面と見られるかもしれませんが。しかしそれは、相互交流を生み出す「創意工夫の源」となりましょう。繋ぐべきは3キャンパスにとどまらず、サテライトキャンパスも、「県全域がキャンパス」を謳う本学の位置する広島県も、すべてが含まれます。

こうした「キャンパスの結びつき(Campus Linkage)」の中で「能動的な学び(Active Learning)」を創る鍵は、行動・参加することを通じ、物理的・心理的な距離を縮めることでしょう。昨年度に引き続き行動型・参加型への授業改善を進め、CLAL(クラル)にこめられた思いを達成していきたいと思ひます。



# 県大AP 始動!!

平成27年3月7日に開催した教育改革フォーラムでは、本格始動した県立広島大学の大学教育再生加速プログラム(AP)事業の報告を行いました。今年度は能動的学修(アクティブ・ラーニング)を更に推進し、本学の教育改革を加速させていきます。

平成26年度教育改革フォーラムを開催しました

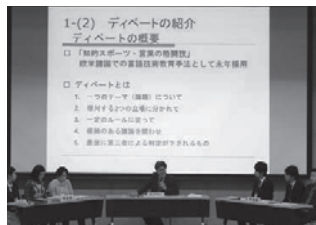
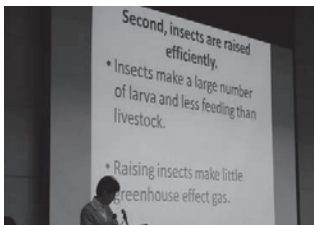
平成27年3月7日、広島キャンパス大講義室を会場として「平成26年度県立広島大学教育改革フォーラム」を開催しました。

初年度のフォーラムは、既に学内で実施されている能動的学修の実践報告を中心に開催しました。まず「学生・教員による取組報告1」では、各キャンパスより2例ずつ、具体的なアクティブ・ラーニングについて学生と教員による事例紹介を行いました。

続いて「学生・教員による取組報告2」では、地域産業界と連携した実践的教育プログラムである「広島プレミアム科目」を取り上げ、科目の概要紹介、及び公益財団法人マツダ財団 常務理事の魚谷滋己氏をチェアマンに迎え、学生による「公開ディベート」を行いました。

最後に、総合討論でフロアからの質問や意見を踏まえた討議を行った後、本学AP評価委員会の委員である肥後功一 島根大学教授より総括のコメントを頂きました。肥後先生からは、フォーラムでの報告を受けて「個々の教員の力だけではなく、組織的に取り組まなければならない」、「成績評価の実質化では、PDCAのCheckの部分が必要である」、「アクティブ・ラーニングは知的能動性の喚起を目的としなければならない」といった、本学のAP事業に対する多くの貴重なご指摘がありました。

今回のフォーラムは、成果報告の場であるとともに、報告事例を通じて本学AP事業のあり方を考える良い機会となりました。フォーラムは今年度以降も継続的に実施していきます。



教学マネジメントの構築にかかる学内研修会を開催しました

平成27年3月23日、広島キャンパスを主会場に、本学の教職員を対象とした「教学マネジメントシステムの構築にかかる学内研修会」を開催しました。講師には、玉川大学経営学部教授で、教学部長(当時)である菊池重雄先生をお招きし、第一部に講演会、第二部に意見交換会を実施しました。

第一部では「能動的学修を促進する教学マネジメントシステムの構築」をテーマに、近年の大学改革における動向と課題、玉川大学の改革事例、ファカルティ・ディベロッパー (FDer) の役割等について講演を頂きました。講演は遠隔講義システムを通して、庄原キャンパス・三原キャンパスにも同時配信されました。

講演会後の第二部では、希望者を対象として、菊池先生との意見交換会を実施しました。第一部で紹介された玉川大学の教育改革について、参加者から積極的に質問がなされるなど、活発な議論が行われました。

本研修会は、FDer養成を掲げる本学のAP事業にとって示唆に富むお話をいただいたとともに、全学で課題の共有を図る有意義な時間となりました。講師の菊池先生に改めて感謝を申し上げます。





## 行動型学修に係る経費助成を行っています

本学では、学外におけるフィールドワークや現場体験を伴う能動的学修を推進しています。授業における能動的学修の導入を加速させるため、AP事業推進部会では行動型学修へ参加する学生に対して、移動に係るバス代などの経費を助成する事業を行っています。

この経費助成事業では、申請のあった取組について、学内運用ルールに基づいて内容を精査し、AP事業推進部会による審議のうえ、助成の可否が決定されます。(助成対象経費は右記のとおり)

なお、経費助成を受けた行動型学修の成果は、報告書の提出や報告会をもって学内で共有します。また申請者である教員は、FDe候補者として学内FDの企画に携わっていきます。

## 行動型学修の経費助成対象

### ◇交通費

借上バス利用料等を助成  
(駐車場代、高速道路利用料金を含む)

### ◇宿泊費

行動型学修を行う場所及び時間を考慮し、  
宿泊が必要な場合に限り、宿泊料金を助成

### ◇参加費

施設等への入場料、見学料、  
各種審査へのエントリー料を助成

## 参加型学修用タブレットPCの貸出を開始しました



ラーニング・commonsの様子(広島キャンパス図書館3階)

本学では26年度、参加型学修を推進するための環境整備の一環として、広島キャンパス図書館2階のラーニング・commonsに、大型電子黒板1台とタブレットPC10台を配備しました。このうちタブレットPCについては、4月から学生への貸出しを開始しています。

このタブレットPCは、ラーニング・commonsの利用者であれば、予約のうえ利用が可能です。電子黒板との連動によるプレゼンテーションの練習や、グループでの議論など、アイデア次第で多様な活用方法が想定されます。

平成27年度以降はタブレットPCの更なる増設を計画しています。ラーニング・commonsを運営する学術情報課と一層の連携を図り、引き続き多くの学生が利用可能な環境を整え、参加型学修に取り組む学生のニーズに応じていきます。

## pickup 県大型アクティブ・ラーニング事例紹介 ～行動型学修編～

### 科目名:情報システム実験・情報技術基礎論 (経営情報学部合同授業)

担当教員:小川 仁士 教授(情報技術基礎論:2年次選択科目)

肖 業貴 教授(情報システム実験:2年次必修科目)

#### 【授業の概要】

経営情報学科2年生39名が、行動型学修に係る移動費の助成を受け、株式会社NTTデータ中国のデータセンター及び新川センサテクノロジー株式会社のシステム製造工場を見学しました。データセンターでは、データビジネスの最先端に触れるとともに、セキュリティ管理の重要性について、身をもって体験することができました。システム製造工場においては、先端情報システムの組み立て現場等の見学を通して、高度な情報処理システムに触れることができました。

今後、授業の中で、今回見学したシステムを具体例として取り上げる予定となっており、授業内容の充実化が見込まれています。

#### 【参加した学生の声】

- ・実際に自分の目で見ることが大きな理解につながった。
- ・製品製造に興味を持てた。
- ・情報系の学科なので、この企業訪問で学んだことが、今後の生活の財産になると思う。



新川センサテクノロジーの職員の皆様と

## &lt;単位制度の意味と授業外学修について&gt;

- ◆ 大学設置基準第二十一条の2において、1単位の授業科目は、45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが謳われています。
- ◆ 45時間の中には、大学での授業時間(1コマで2時間\*)と、自宅等で行う授業外学修時間が含まれます。(\*本学では、1コマ(90分)を「2時間」としてカウントします。)
- ◆ 学生便覧の教育課程表上、授業時間数が「30」と示されている授業は、週1コマの授業を15週行うという意味です。週1コマの授業で修得できる単位数は、1(主に演習科目)、もしくは2(主に講義科目)です。
- ◆ 必要とされる授業外学修時間は、次の通りです(授業外学修時間は「1時間=60分」でカウント)。

## 必要とされる授業外学修時間

科目の単位数	(a)必要とされる学修時間	(b)授業時間(週1コマ×15週)	(c)授業外学修時間(a-b)	(d)週あたりの授業外学修時間(c÷15)
1	45	30	15	1
2	90	30	60	4

【例】Aさんの場合：1単位科目を6科目+2単位科目を9科目履修

	月	火	水	木	金
1			演習(2単位)		演習(2単位)
2	演習(1単位)	講義(2単位)		講義(1単位)	講義(1単位)
3	演習(1単位)	講義(2単位)		講義(2単位)	
4		演習(1単位)	講義(1単位)	講義(2単位)	演習(2単位)
5	講義(2単位)		講義(2単位)		

## 授業外学修に求められる時間数

1単位科目：週1時間×6科目= 6時間  
 2単位科目：週4時間×9科目= 36時間 } 計 週42時間

- ◆ Aさんは週に42時間の授業外学修(もちろん、授業時間は除きます)が必要です。これは、例えば週末を使って12時間勉強する場合、残りの30時間は月～金の5日間で学ばなくてはなりません。つまり、週末の12時間に加え、平日は平均6時間の授業外学修が必要ということになります。
- ◆ 授業外学修には、学内では図書館、ラーニング・コモンズ、コンピュータ室、CALL教室などが利用できます。学外からアクセスできるeラーニング教材もありますので、学生の皆さんは積極的に活用しましょう。

## ■ 県立広島大学 AP関連ホームページ

AP事業紹介ページ

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/>

ラーニング・コモンズ紹介ページ

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/lcs/>

## ■ 本学AP事業に関するお問い合わせ先

## 県立広島大学 AP事業推進部会

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号

E-mail: [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

Tel:082-251-9710(直通), Fax:082-251-9181

## 編集後記

今回のニュースの編集にあたっては、アイデアを巡らすために様々な広報物に目を通しました。他大学のニューズレターや学部・学科の紹介資料、あるいは自治体の広報誌などを手に取りましたが、「書き手側の様子が伝わり、「〇〇らしさ」を感じられる広報誌とはどのようなものか」ということについて深く考えさせられました。

さて、今号にどれだけ「県大らしさ」が表れているかは分かりませんが、4年というAP推進の事業期間を通じて大きく生まれ変わっていく県大の姿を、このニュースを通して少しずつでも伝えていければと考えております。今後どうぞご期待ください

(AP事業推進部会ニュース編集担当 伊藤 俊)



Acceleration Program

大学教育再生加速プログラム

県立広島大学

Prefectural University of Hiroshima



# 行動型, 参加型アクティブ・ラーニングとFD, SD

代表発表者： 県立広島大学 総合教育センター 馬本勉  
 共同発表者： 県立広島大学 本部教学課 川口博之, 濱田縁, 伊藤俊



## 1 県立広島大学について

- 県立広島大学は2005年に、広島県内の3つの県立大学が統合し開学。
- 広島市、庄原市、三原市の3キャンパスに加え、2013年にはサテライトキャンパスを開設。「地域に根ざした、県民に信頼される大学」を目指す。
- これまで県立広島大学は「遠隔講義システムの導入」や「全学共通教育の見直し」といった、3キャンパスが一体となった教育改善に取り組んできた。
- 一方で、学生の授業外学修時間が伸びないこと※1、3キャンパス間での学生同士の交流が十分に図れていないこと等については、長らく課題とされてきた。

※1 新入生意識調査の結果より



## 2 行動型, 参加型アクティブ・ラーニングの推進

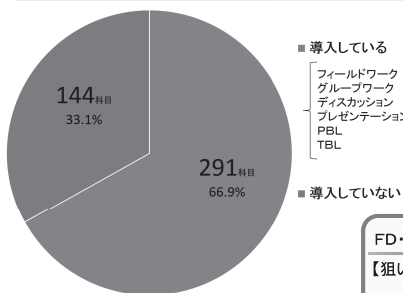
- 本学は平成26年度、文部科学省「大学教育再生加速プログラム(AP)」事業の「テーマI:アクティブ・ラーニング」に採択され、学生の主体的な学びを引き出す能動的学修の更なる推進に着手している。
- 本学が推進する県立広島大学型アクティブ・ラーニング(Campus Linkage Active Learning: CLAL)は、**広島県全域をフィールドとして教室外での学びを取り入れる「行動型アクティブ・ラーニング」、新たな教授法の開発・導入により学生の知的能動性を揺り動かす「参加型アクティブ・ラーニング」**を基盤としている。
- この2つのALを推進することで、キャンパスの枠を超え、知的能動性にあふれた新たな学びの形を展開していく。



## 3 CLALの実質化を加速するFD, SD

- 平成26年度に実施したAL導入状況に関する学内調査※2では、既に約7割の授業で導入済みという結果が得られた。
- 一方で、ALにより学生の自律性を高め、授業外学修時間の増加へとつなげるには、ALの更なる質の向上が必要である。
- AP事業を通じて、本学が実施してきたFD, SDを更に発展させ、CLALの実質化を加速させていく。

全回答435科目中のアクティブ・ラーニング導入率



CLALを実質化する  
FD, SDの充実

### FD事例 ファカルティ・ディベロッパー(FDer)の養成

**【FDerの役割】**  
 アクティブ・ラーニングを実践し、その波及・浸透に努める。最終的には、アクティブ・ラーニングの視点から学部・学科のカリキュラムへ提言を行うことを目指す。

**【養成人数】** 各学科2人以上、全学で30人以上

**【養成方法】** 3つのプログラムを段階的に実施する。  
 入門編(H27) ⇒ 応用編(H28) ⇒ 実践編(H29)



### FD・SD共通 学修アドバイザー養成に係る教職協働

**【学修アドバイザーについて】**  
 学修アドバイザーは学生同士の学修支援の充実を目的として養成する。主に各キャンパス図書館ラーニング・commonsで、他学生の主体的な学びを支援する。

**【学修アドバイザー養成に係る教職協働】**  
 教員と職員との協働により、学修アドバイザー養成講座の運営やラーニング・commonsの継続的な整備を行うことで、学生同士がともに学び合う環境を構築していく。



### FD・SD共通 先進事例調査・研修参加の促進と学内フィードバック

**【狙い】** FDや授業改善に係る先進事例調査や、研修等への積極的な参加を支援し、全学的に促進する。得られた知見や情報を学内で共有し、情報の「収集」と「共有」の好循環を図る。

**【学内フィードバック】** 教員…全学FD研修会やFDer養成講座等での報告を通じて、全学へ情報を発信する。職員…課内で行う「フィードバック研修」にて報告し、出席者と情報を共有する。  
 (本部教学課で先行実施)



※2 調査機関 平成26年12月16日～平成27年1月20日  
 対象 平成26年度授業担当教員(専任教員・非常勤教員)  
 調査方法 回答用紙およびGoogleアンケート

## 4 FD, SDの課題：全学的な共有へ

CLALの推進に係る本学のFD, SDについて、次の2点が課題として挙げられる。

- (1) FDの課題…ALの導入状況やFD推進の意識について、学部・学科間で差がみられる。全学的なつながり(Campus Linkage)を謳う本学のAP事業においては、学内でFDを推進する意義・目的を強く共有し、合意形成を図っていくことが、効果的なALの導入につながると考えられる。
- (2) SDの課題…各種研修等で得られたALに関する情報やノウハウを事務局内で共有する機会について、現状では本部教学課で行うフィードバック研修での報告に留まる。全学的な職員研修との連携等により、先進的な情報を広く共有していく必要がある。



# 県立広島大学（取組期間：平成26年度～平成29年度） テーマ名：テーマI（アクティブ・ラーニング）



## 事業の概要・目的

### （大学の課題）

それぞれ100km距離が隔たる3つの県立大学がひとつに統合され県立広島大学となり10年、地域に根ざした県民に信頼される大学をめざして、わたしたちは教育と研究、地域貢献に力を注いできました。そしてそれぞれに個性を放つ特色ある4学部・11学科・1専攻科の強みは、教員の高い研究力を基盤とした確かな教育力であり、授業に対する満足度が90%を超えるという数字がそれを裏付けています。

しかし、その一方で授業外学修の時間は伸びず、学生の主体的学びを引き出せていないという大きな課題を抱えています。

### （課題解決のための取組）

上記の課題を解決するため、本学では、アクティブ・ラーニングを「学生の主体的学びを引き出す能動的学修」と考え、この定義に基づいて「県大型アクティブ・ラーニング」を、共通教育と専門教育の双方に計画的に導入することとしました。その方向性は2つ、1つは教室を飛び出して地域で現代的な課題の解決に挑む**行動型学修**、もう1つはディスカッションやディベート、グループワーク、TBL、PBLなどを取り入れて双方向授業を行う**参加型学修**です。いずれも体験と対話を重視することが基本です。

## 人材育成の取組

### （養成する人材像・具体的な達成目標）

- 実践力、コミュニケーション能力、幅広い教養及び高度な専門性を有する、高い志とたゆまぬ向上心を持った「自律的な学修者＝アクティブ・ラーナー」を育成します。具体的には、次の3点の取組を重点的に推進することとします。
- (1) 行動型、参加型の2つの能動的な学修を軸とした「県大型アクティブ・ラーニング(Campus Linkage Active Learning:CLAL)」を全学的に導入・推進し、アクティブ・ラーニング導入科目数の割合を最終的に60%まで向上させます。CLALを通じて学生が主体的な学びの姿勢を身につけることを目指します。
- (2) 学内のFD活動を牽引する「FDer(ファカルティ・ディベロッパー)」を各学科で2人以上、大学全体で30人以上養成します。FDerを中心として組織的なFD活動に取り組むと共に、各学部学科の特性に応じた授業改善を計画・実行し、アクティブ・ラーニングの積極推進を図ります。
- (3) 参加型学修を支援する「学修アドバイザー」を学生の中から募集し、事業終了までに55人養成します。学修アドバイザーとなった学生は、ラーニング・コミュニティを中心に、他の学生の学びをサポートします。

### （取組内容）

#### <行動型学修・参加型学修>

平成27年度から、全学共通教育科目に、地域と世界への理解をふまえて、考え、行動する力を養う「広島と世界」の科目区分を新設しました。

#### <組織的な教育力の向上>

全学的に行っている授業公開に関してその参加率を高めるよう促進し、教員個々のノウハウを共有します。また、外部講師を招いた「FDer(ファカルティ・ディベロッパー)養成プログラム」を実施し、学科に2人以上のFDerを養成し、組織的な教育力向上を図ります。

#### ●事例1

「地域情報発信論」の開講  
(全学共通教育科目・広島と世界・2単位)

#### <科目の概要・ねらい>

本科目では、新聞で報じられた地域の情報を素材として、新聞の読み方、取材対象の見方、記事作成の手法を学ぶとともに、新聞情報の分析を通じて地域の諸問題を掘り下げていきます。

平成27年度は、「原爆ドームの過去・現在・未来」をメインテーマとし、被爆70周年を迎えた広島「これまで」と「これから」をめぐる議論を題材として取り上げます。記事を読み、現地へ向いて取材を行った上で、口頭で意見を述べたり、記事として文章にまとめるなどの発信方法を学びます。さらに、グループで問題解決への提案をまとめ、プレゼンテーションを行います。

#### ●事例2

「FDer(ファカルティ・ディベロッパー)養成プログラム」

#### <プログラム実施計画>

##### 平成27年度 入門編

「授業時間外の学修時間を増加させる教授法の改善」をテーマに年間4回開講する。

##### 平成28年度 応用編

学内講座だけでなく、反転授業を取り入れて授業を行っている実践校を訪問し、授業を参観することで、教授法や生徒・学生への効果を調査する。

##### 平成29年度 実践編

最終年度は、プログラム受講者がこれまでの成果を実践し、授業公開を行う。さらに、その成果は1月に開催するフォーラムで報告する。

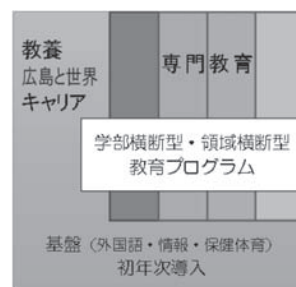
3年間のプログラムを修了した教員は、「組織内FDer」となり、大学の理念にあわせたカリキュラムの開発や大学全体の組織改革を行います。

### （卒業後の学生のイメージ）

自ら考え、課題に取り組み、解決に向けて行動することができる学生

⇒ **アクティブ・ラーナー**

- ① 生涯にわたり学び続ける自律的学修者
- ② 幅広い教養と高度な専門性を備え、社会で活躍



平成27年度から始まった  
学士課程教育のイメージ図

### （県立広島大学の特徴）

本学は、平成17年に広島県立の3大学を1大学3キャンパスに再編統合して設置されました。「地域に根ざした、県民に信頼される大学」を基本理念として、「主体的に考え、行動し、地域社会で活躍する実践力のある人材」を育成することを目標としており、これまで、各学部学科における3つのポリシーの見直しによるミッション再定義、カリキュラム体系化による教育プログラムの再構築、3キャンパス4学部の連携強化による教育効果の向上など、段階的に教育改革に取り組んできました。

これらの取組を通じて、過去数年間、本学は授業に対する学生の満足度や教員の研究力を向上させており、本学の教育・研究活動は一定の評価を受けています。その一方で、各学部学科のミッションに沿った組織的な授業改善や、新たな教授法の開発については、未だ課題として残されています。

これらの課題解決に向けて、「県大型アクティブ・ラーニング」を核とする積極的な授業改善に取り組み、教学マネジメントの強化や新たな教育手法の確立といった、更なる教育改革を推進していきます。

具体的な実施計画における指標	25年度	28年度 (予定)	29年度 (目標値)
アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合	88.1%*	45%	60%
アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合	46.6%*	45%	60%
アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合	100%	100%	100%
学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数	9.4科目*	6.0科目	8.0科目
アクティブ・ラーニングを行う専任教員数	166人*	115人	150人
学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間	週10時間未満	週12時間	週16時間

\* 25年度はアクティブ・ラーニングを再定義する以前の数値であり、予定・目標値を上回る場合がある。

## 広島を新聞記者の立場で考えてみる



県立広島大学  
経営情報学部 経営学科 2年次

カ石 光

被爆人形の撤去問題や旧市民球場跡地の利用法について、5日間かけてじっくりと考える良い機会になりました。中国新聞の方々の指導のもとで、実際の記者のように取材をしたり、調べたことを紙面にまとめたりと、普段なかなかできないような貴重な体験をさせていただきました。今後も機会があったら、ぜひこのような体験型授業に参加してみたいです。

(平成26年度「地域情報発信論」受講生)

平成27年度 県立広島大学教育改革フォーラム

# アクティブ・ラーニングの 導入と評価

平成28年

3/4 金 14:00~17:30

参加  
無料

県立広島大学 広島キャンパス 大講義室  
広島市南区宇品東一丁目1番71号

## ◆プログラム

- 14:00~14:20 挨拶・講師紹介
- 14:20~15:30 講演&ワークショップ  
「アクティブ・ラーニングの評価について」  
ルーブリックの現状と課題  
龍谷大学 文学部 安藤 徹
- 15:40~16:40 県立広島大学における事例紹介  
「行動型学修が学生にもたらすもの」  
『留学生と学ぶ広島』を例として  
人間文化学部 国際文化学科 柳川 順子  
「語学におけるグループワークを  
取り入れた参加型学修」  
保健福祉学部 看護学科 本岡 直子  
「看護学科における  
アクティブ・ラーニングの実践と共有」  
保健福祉学部看護学科 黒田寿美恵  
「経営情報学科における  
アクティブ・ラーニングへの取り組み」  
経営情報学部 経営情報学科 小川 仁士  
「環境科学科におけるWGを中心とした  
組織的教育改善への取り組み」  
生命環境学部 環境科学科 原田 浩幸
- 16:45~17:25 全体討議
- 17:30 閉会
- 17:50~19:00 情報交換会(参加費1,000円)

## ◆対象

本学教職員・学生、大学関係者、高等教育に関心のある方

## ◆お申し込み・お問い合わせ

県立広島大学 AP事業推進部(本部教学課内)  
〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目1番71号  
TEL.082-251-9710

### ●お申し込み方法

3月1日(火)までに、E-mailまたは裏面の申込み用紙に  
必要事項を記載の上、下記FAXまでお申し込みください。  
E-mailの場合は、①氏名、②所属、③住所、④連絡先電話番号、  
⑤情報交換会への参加有無をお書きください。

E-mail. [kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp](mailto:kaikaku@pu-hiroshima.ac.jp)

FAX.082-251-9181

## おわりに

平成 26 年度、27 年度の AP 事業実施報告をお届けします。この間、自律的な学習者（アクティブ・ラーナー）の育成を目標に掲げ、アクティブ・ラーニング（AL）を軸とした本学の教育改革の取組にご協力くださった全ての皆様に感謝申し上げます。とりわけ、本学の教職員に対する研修を通じて多くの示唆を与えてくださった講師の皆様方、開始直後より私たちの取組を見守り、ご助言くださる評価委員の皆様方に、心より厚くお礼申し上げます。

本学における AL の状況をみてみますと、専門教育、全学共通教育を問わず、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを中心とした参加型学修の導入が進められています。実施教員の間では、学生の授業への参加度が増し、理解度の向上に結びついていることが認識されています。全学共通教育の科目群の一つ「広島と世界」に開設された科目においては、3 箇所に分かれたキャンパス間の距離を「強み」と捉え、専門の異なる学生間の交流を伴うフィールドワークも定着しつつあります。

私たちは、参加型・行動型の AL 実践が「アクティブ・ラーナー」を育てる上で効果的だと考えています。それが本当なのか、検証を重ねていかなければなりません。そのためには、評価のあり方を検討し、深めていく必要があります。組織的なルーブリックの導入は一つの鍵となるかもしれません。

これまでを振り返り、次への課題を一層明確にするため、平成 27 年度末の教育改革フォーラムのテーマを「アクティブ・ラーニングの導入と評価」としました。「導入」「評価」「組織的対応」という 3 つのキーワードを掲げた本学の実践報告と、ルーブリック先進事例の講演&ワークショップによって、私たちの取組は次のステージへと進み始めたことを確信しています。

採択から 1 年半が経過しました。CLAL の 3 本柱である「AL 推進」「FDer 養成」「SA 養成」を着実に進める上での課題はまだ山積しています。AL 実践の共有と評価方法の検討、FDer を中心とした組織的研修の実施、教職協働で SA を育成することなど、これまでの取組をさらに発展させなければなりません。

最終的なゴールは、本学の学生が「生涯学び続ける自律的な学修者（＝アクティブ・ラーナー）」となることです。これは大学生生活を送る 4 年間で完成するものではありませんが、CLAL の取組が自律的学修者の基礎を培うことを期し、教職員が一丸となって、さらなる努力を続けてまいります。

本報告書をお読みくださった皆様へ感謝申し上げますとともに、引き続きご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月

AP 事業推進部会長 馬本 勉